



特別
~ 12
1077
22





利
1077
2122



● 乙女

● 卅二歲

諒闇

任太政大臣

四月一日更衣改服函服事

權斎院除服事源氏訪行事

大殿若君御元服事 夕旁大将乞也

六位還殿上事

冠者君付字事 於东院有出事

入字事

寮誅事

文人擬生事

梅壘女御之后事

源氏之后連續夏

源氏任太政大臣事

大將任内大臣事

系圖云母按察大納言の方

冠者君与内大臣四君服姬比奈遊事

雲居屋是之

内大臣殿依姬君の悉大宮給事

姬君奉渡内大臣給事 姬君十四

血節事

惟光良清女房^馬血節事

冠者君聽直衣奉内事

源氏是文於筑世血節事

冠者君是文お惟光女血節事

花散里君為冠者之後見事

亦三歲 太政大臣

正月太政大臣覽青馬事 忠仁公例云し

二月朱雀院行事 三月女院為正月故之

於御前文章生誅事

於御殿太后御前御面事

大學君補進士事

同秋除目任侍從事

六條院造作事 六條院京極中宮所故

宮造四町云々

廿四歳

春式部口宮五十御賀事

八月六条院造畢御方へ移徙事

花散里 良町 紫 葵町 中宮 坤町

九月秋好中宮被身取葉於紫事

紫上御也事付立紫松事

十月明石上渡六条院事 乾町

し女

并原

以詞并歌鳥卷名

をよめこまかみさひぬらんあうの神
あまの世の友よりいぬぬまきん

詞けりしあめとありけりしとあはす
いとおほしとけりしあはれあはる
詞よあり

何 秘

凡此卷五節并非中鳥宗何有此名
卷名以詞并あ号之五節中事あはる
よ号ととらるる源氏亦二の四月り

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

亦曰乃十月まで此よりしてなり 然日
源亦二よりしてよなる 亦曰乃林まで
雲井乃馬六幸十四より
私云十月までと只此より

とく六月まで宮乃所とてとて此の事ハ

何 薄雲女院一園忘之豫園也改より
花 去年三月薄雲をくれば此中より
月園園より何なる也 非日

秘 薄雲豫園三月まで也 只今豫園并
月乃衣久之

在中色何なるは此より衣久乃がと
何 除服事之除服とい服とぬきゆり
いよ

天下皆豫園の版とわくさむく則
又四月更衣此はよらひあふや

侍てまげり乃此ハ

賀茂祭也

大さの元々き一程を

秘 日月天氣和又清とそり

秘 日月ハ清和乃多氣とそり

并 諒園の後世中乃人此をくら

わく

巴 さい ち
おそ東院ハけまくと

并 此のハより力あふとそり

糸の比砂流よそり事うとそり

いほふよいけうつまくとそり

はま(おろか)げれまくと

秘 桃園乃花日あり様

秘 庭に花より人々糸は換うと

思ひひりうと 并 日

大殿より雨うまくと日ハ

何 秘

亦流石御乃日く

笑後流御日く祭乃三日あく 春日

因午日アリ云

夕六

私

私みの詞是よりあつりより詞く

こころはあまていしより 庄原氏は由の

詞く下のあふよりいしより詞くをこし御

禊乃日すてはる流石の流脈よるせよ

念しとて思ひよりあつり一筆

私三女口よりいしよりい けきと申し

はまきしとてあつりまてみるこころ

けきやハ川せの流と云よりあつり

乃ちあられ屋つま

思ひけきより事とて去るよとてハ流石

こころと申しけきとあつりあつり

あつりあつりハ流脈は日の後あつり

あつりあつりあつりあつりハ流脈の所

あつりあつりあつりあつり

友と闘よとせり此物決何まゝあり
あり

を

しげふやうと思ひまふやうに
乃ちつまに直衣と云ふしと川の闘よ
多てとりなると何の闘よいふ
須ふとあらよ身とまきりへ
いれれありと云はれてみるあり
みまふハ母院の山陰膝事
考る人まきとハ陰膝の日乃按事

并

いづう母院ありまをたて陰膝れ
そまう活人と思ふけり
或又の説此の陰膝の事ハ
ままそハ祭乃そまきよ
まハ川久やうに
そハ多(ま)とハ
中まをとりまハ何
今日陰膝といふ
ふまハ木がまらんとありと陰膝

はるるん云

私共流僻業くをりしあ乃花鳥下
乃美と月へ一帯れ美とし日陰
服れこうきうはふといふははり
去の糸もてはは襖ははひはり
し年ハ友乃屋事とあしめはみ
それと一はりんよりと清襖れ
みささよはひひよせうりりり
ひしはさくしりさくし

七

雲乃紙はかくハ友はけり友ハ又
友衣よあしりや 春日

秘

くら乃紙はばあしりハ友衣よえん何
し

おりのりれまきし

井

たさくハはれ又うしとむらうし
はよれハ長女よりとささしくは
あま

秘

何よりと其時節は盛あらし

五権研虎

少ら衣三ーハぼるしはふまにりやるみ
そまのせりうりやせ

何日

花鳥川園よそ何くわつあもせよ
うはりし物にうまひり

心

夜乃のつまもぼりし思ひれはるや
めりりよめて除脹しほんせよ
世ハ右とのう花鳥川ちらーと約り
せにうり約れと業とせり

秘

除脹のみまきりし月日なるうりし

花鳥川ちらーの心

或事花云れせやハ除脹とみれしと
是ハ年月経もりて去りぬの心
やハぼりうりてこまのねよぬら
とつやくや去年れ糸まてハ糸流
よてあしうりし文よるれ
ほくみみうまハ雨襖のぬきぬ
トアリ

私

け事花の委るや不見何はの心

為事之能者よと云や一めくうふめて陰陽
り一何事と或る乃宮くれば其の
日月よりなれるか一しか友衣か
ときてけりきよのまに又能く由
乃はよぬめりりともみ流つるや
くろくともり

秘
奇れ中よとくさき事と何は何と
さばけ何れと云と足とく事何
け何とにめてみ

いれりて

原也

御ぞなと一乃ほと

秘
又まれの服とめき流一ハ右服と調て
原よりきせ流と

院ハみろき事よ
秘
院ハみろき事よ

原れ秘人ころり新ハ東院ハ

くそんぞく

ききききききききき

月夜めききききききききき
ほひしもくもくもくもくもく

ききききききききききき

秘 新院よほりききききききき

つねの事なれいと宮方なりききき

女力乃宮れゆききききき

女も多しとも同しききききき

候ほひて源とかめほしとせき

おとらびてききききききききき

源とさゆきかめききき

ききききききききききき

秘 新院へれゆききききききき

ききき

私源れゆききききききききき

とれききききききききききき

とらききききききききききき

大御所にむいせん

秘

女大宮東院より對面しむく教訓

御定

并

女宮御後の御さして源氏御さし

御定

うたういぬりしめり

尋つたふれ素素も御院より御定
申はなえとと思ふ御さし
私源氏よりしめりしめりしめり

と何しきとこみや

大宮とすらしむり行て

秘

源氏より人より御さし

申し思ひ御定

并

女大宮東院より御定

秘

とらんとたは他縁よりなりて系圖を

とふとあはけりしと見え御定

源氏より我はことと御定

系圖乃御定

たしひもら 一 事と

或る御宮に侍とせむにいと思ひ
もらひゆりて

あまらにむせとれき

今更乃にわよ同公うらりて
く肩きにおほりて

或る宮後梅よりと女立様
れはやく

所事とこ大殿の姫衣

^秘 奏上とく

三宮のむひ行りん

^秘 奏乃母女女のあはれ

或る女いさやうふのむひとて
のをとくうりて我の河とせとく

一とく

えはぬもらうとれとれ一人

^秘 奏上とく 花日

あまらむせとれとれ

原よあひはてとも命のよはて

ゆゑうりてひ

何 又よ音よ立うりてく

秘 東院おり ぼて又原氏わねまらひ

秘 ぼふ事 弁日

秘 此詞物氣の事よあり

心付くなりと

秘 新院乃由ゆ

二宮よとーう公あふれ

々東院乃西詞く又まもあうよまら

ハ今さうそれゆと何ゆめりとや

んばうをわら

新院の心うくさうけよのねひな

とあよ女め宮乃かむねてとえねね

なり

おむむけ新るん

えいひおりねらぬくまのさええわと

ひせぬとせ

宮人そ

秘 まつらうんてく

いとくしあめくくゆ

弁 東院のいん

宮人とて源へこれんせむい

ふ事うま年人と辨院れ何や

笑とん

う乃いん

秘 源へ

弁 源のいん

このいん

是よりハ源氏若くはよ回つ

流んやうきこん年とあふ

秘 是まて東院乃い事

奇院乃御いん

ゆらういん

乃いん物

よ源とく

寺り新ひて宮人さもの門いまでいさ
乃事と何りていそ用急の事
さるへいといほれいと察してきり

大殿のつれよりま

秘 是より夕旁れり

いきん少く事

秘 夕旁十二より 事日

夕旁十三より 十二元服の相違は候

大まのいゆき

秘 夕旁の 祖母

かの殿より

秘 三條より

右大将より

秘 二條抄改書 事日

後小致仕ち下りきこれ中ね夕

旁れ伯父

いせら乃殿よりいれんめらめ

右大将の外右大納言去文ちまう

元服後叙

四位例

兼和光惠良

親王加冠即叙

四品月二年

正道王加冠

即叙四品

德輔朝臣

於内裏加冠

叙正四位下

系圖よりあり

四位例
親王加冠即叙
四品月二年
正道王加冠
即叙四品
德輔朝臣
於内裏加冠
叙正四位下

親王乃子ハ元服乃後ヤクテ從四位下
叙と原氏若クハつ紅の原氏ハ日例ノ
らとあり親王ノ子ハ亦して從位ノ叙
所ノ人トモクメリリハれモハれ新
叙何ラリヤ

一世乃原氏ハ貞一從四位下ノ叙と知

常ハ二世乃原氏之ハ五位ノ叙と云々

きとてタチ旁ハ世ハ叙ハもあつたりて定て
從位ノ叙ハ一ハと在るハ今ト云フナリ

孫王貞叙從位中上右定事

見續日本紀
不違與錄

遷叙今日ハ薩皇親者親王子從四位下

諸親王者不限有品元男皆是一ノ内令稱親王不注品

階者皆依此例

原興基

原正尹人康親王男

貞觀八年正月七日叙

從四位下無位

原博雅

兵部少輔親王男

養正四年正月七日

叙從四位下 日元元位

親王子直叙四位雖為流例一世源氏大臣息

大略叙爵於源叶 信大臣子 同辭 元大臣子 伴涉 兼

親王子 忠賢 高明大臣子 皆是叙從五位下者也

六条院 于時大臣也 如何因茲四位少ありてんり

一とわりのとを稱有軒殿也

或は説に位をさるとおと軒殿をく六位

小形一のみ是ハ大學乃道よ今んま

平人の七位をとり六位へのありて大なる

及よ入とハ位とさりて六位よて大なる

道よい進せり於源の正公付格也

きよひいなり

夕穿れ事也 雅 キヒク 日本紀 イトキナキ

より公よはるせり世あり

源の心つらひを政及よるなり

きよゆかり好るんを

秘

不意に松のひげりとなりて

何さきよとて殿上より下り

歩負

六位緑袍

童殿上以後還昇

秘

あさきよの六位の袍と下り殿上に上り

ハタチ弟ハ童殿上として童袍として昇

殿一あり今これハ金うてわりのひらり

ソウリ

一世の源氏の子ハこれ薩従五位下

あけれ袍とまうして昇をさる冠

者乃若れ何さきよとまう半ニれ公あり

五位の履よりと下りて叙爵せき

永時ハ五位へ延長継殿寮式ハ五位後

貫と下りありあよ何さきよにて殿上に上

とソウリ五位ハ黄袍と下り一統あり相重

乃若れよきよ一ゆりぬ一云六位のみこれ

袍と何さきよとソウリ緑緑乃色ハ藍と

前安と下りて深より何さきよハ又よき

ひらりぬこれよりりて三条上乃何の

殿詞よ六位とくせといひ次第の事よ
いあきみよりとわしひきつるこもい
まは六位の袍よて還昇きりといふ
まにわ

いふいふ人何りて

秘

大宮源に宮西一様よて

六の幸きこころよ

六位よてとまはゆみ八公ゆみなり
を
のゆみ

をひけつとぬーら

何

加階とくくうて人よ階つていま

より美く 親行流

或説云老はくはいぬりおとま

まにわ

秘

昇進よ人の階つていふはく昇日

林ゆいまかり何まらありま

まよとつまうはるは源の詞

大かろみらりーとりーまーいんら

西三條右大臣良相公因院在大臣之嗣云
乃子之右后息大季此道と云々小望此
例やくりく河海に及びたり

尚書大傳曰古帝王必立大学小学使公
卿之太子太夫之元子士之適子十有三年
始入小学見小節年踐小義年十有三年
立入大学見大節年踐大義年入小学知孝
道長幼之序入大学知君臣之義上下之位
實錄曰大臣在臺里稚局量用明及於弱

冠始学大季稚有文并

論論三年学不至於穀不可得而已
貞觀格云大学尚文之处養賢之地也
天下之後咸来海内之英並萃游夏之
徒元那公相之子楊馬之出自寒素之
門高文未必貴種之未必高文且夫王
用革人才是貴朝為廝養長夕及皇公卿
礼字記玉不琢不成器人不学不知道之
故古之王者建国民君教士子為先ト云

秘

雖有嘉肴弗食不知其旨虽有至道
弗學不知其善

大學子鄭氏注之大學者以記其傳奇
以為政也

丞相の子息大學の道に入る良相公
俊賢卿士の例を

或清説藤氏勸學院 源氏を將
學院橋氏の學院とをきて
其氏くは儒者あり

海二三年と

及七三トセ

平ひとかなり

学又あるしより一はつとふく奉
乃るあを立身かともまきとや

足ゆゝいされへりらよ

秘 海の自然

よりひるおあよ

相みとの所を

海一と記してより海之の

秘

延壽乃帝よりあひたりくふとされ
さくともよんしゆの事にてあるよし

文はく

弁^{モリ}文^チ文^チ文^チ文^チ文^チ

うーこふかほのりはくもつ事と
阿まこふひりくはるもぬらこも
ぬ事ありし

ろろねまたやよきー^一延子よはらぬ
ゆー

秘

賢子と忍又よとつふとさこもい

ろりや況愚子乎 弁日

子のうーこきこいふとろりれーとい
ぬあやにまらふ事いふれもいせ
これいふこの事と舞の又り教腹と
まそのもあれろや又見過た師或師
半徳といつり又子の道とこれか
かーかー

私原乃ーこき延壽の情いふ何

そはくきろくを思ふれはまて大ま
も入すて原のを一はゆふく父
弟のいふとるのまふんといふを
はましくはくをりいひてまゆへはる
ゆらまか

さやうに次東くよとらちていひ
あくそくいひてゆへ懸満よを
そりちをく

ふつふ家りひらして

世同乃事とあまくのねぬ

位とまけり家とまれ官位りのほら高

貴に成りましく字文うまひ身とく

一むら人のなまけりて

時りきろくを人のりてたはるまは

ろきをきりて

何
ろけりろき月くハ一や或月まけ

眺 史記項羽本紀

花
志くまめゆりろきをきりてくとり

半々なり

當分の事なく六位よして不足なる概れ

とて後年と思ふ有ありと源の河

氏乃世れと

夕霧終よ八政及捕法の賢文は且

まんとと思ふ有くトヤ

ゆとむり人後とてうおさう人か

ふりりかん句

秘 源の豊をて後て後て後て後

とく 松井井よ源のた意のひ

ありき事ヤ

多い海はうくかすまうとく

くく人ゆくく世りきう大子のう

とてわひあはけう人

何 窮途急 日本紀 窮者 同 簿 文字ノウキ

うはかの物語しせまりめう大子の

まうとあり

花 せまりハ窮者之除月の回品れ籍り

内豊之窮者といふ事ありきとは大志
れ能くしう〜ス〜く有る昇進か
と成せぬ也

窮者として大志の道よそみかき昇
進するをせぬ人といふよりして早
下の詞

私せまりより大志の流ハ窮屋
てくひろい〜そかき事よ〜るなま
回より外的事なる〜くひろかき

はちろく〜

うらるべきいお〜

秘 大宮く

げふり〜

候の理もむさろ〜との行ぬ

この大将う〜

引きろく〜

あ〜り人のさひ〜の事〜

これおさふ〜

夕霧乃公中と大まのりまへ

大将乃其のよしとてか

秘

乃其の猪ハ大将と別服の兄弟也

系圖より後大細て春宮大夫二人

四廿乃其の猪云々

あさきといこころ

六位の事也大まのり詞

ららりひ行ひ

秘 源

いとよまむて

是らり源乃詞

とよまむてらりまらぬひてまを

うなまむ事とれらる事也これなり

よまむハ 秘 夕霧乃の事との源也

色くよの源ひて夕霧乃事と公

うほくしとせし源とぬ

かきんたしとすう地乃心えゆ

源乃詞字又とて地乃源と

くをれ〜〜みを自然にみせり〜と
と也

河さかたに〜家事〜ひひん〜此院を

并 二条乃东院之

秘 字之儒者よなる〜てい必あつ〜文

章院よて堂監といひ物うの簡よか〜つら

く文屋康秀と古今序小文琳とをり

も字くけ敷くあ抄〜くり〜み〜り

何 礼記曰己冠而字之成人之道也 字所以相考之

今案六位冠者其姓ニ字ニ具メ江橋宣原

栄ト曹司ニテ喚ク

水原抄云假令者原ツモテ大堂ノ字トセヨ

文章院ノ堂監ト申者ノ書クタス受侍

是ハ當時モ後院ノ初祭ノ時吉書字ニ書

入字ノ名簿ヲ秀リテ随才メテ其時堂監云

トカタケノ漢家ニモ侍云ニ本朝ニモ假令

忠臣トイヘルカ字ハ達音是躰ニ侍近代

其後モ絶侍ノ登者ノ時ノ時必字ヲケ

侍せ

を
太子生入学乃時文章院乃堂監か去りて
名簿よ字とくく之聖廟れ此字ハ菅三三
善清行カ阿さ子ハ三耀と云り夕弟れ
あさるを原るはとるへん

あは〜く〜び〜

あ〜〜き作法と云〜

〜あハ不審然ん

〜せとと〜の魚

博士 臆

は〜あ

秘
原れ此子なりとてあ〜と〜
事ら〜り何り法式れ〜
お〜へき〜と下知

三つてはまじり

騰一ぬへきと命一しきみく事
したこまじ

家よりほろあそとめふ家ほうきま
しら何とんこく

秘 窮一あり儒者ともいほ借意
并 借衣

私儒者ハ和漢よりふとせう海きり
めや貧儒るとありくしり并

或所現
秘 榜不餓死
儒官多ク誤身

并 かくなり 并

今かりくち装束をいへら何と
しりさくくま一なよかく好
まし何れあはやくもいへり
何 化あり来りち装束くといへり
とハ右弊の泡れ肩の破裂ぬき
といふを
仔細地語云志んぬればこりよの
らぬとあひていへりあり

公所一をいふはれとあつて
りきとなつてはつたきしうはつた
かといふやうな事ありて
てふやうな事ありて
なとお似え

ひくく

同云理字くもつ物よ現運成心く
家ハ物くひるしきありて

秘

まろくはまはつたつて

庵りるしと

秘

取ととらへ

瓶子取庵りて取とらへ
とらへを代り半く今も瓶子
舎り時とらへ

すらと物らうは海

秘

傳をいふはつたつて

秘

けきある取らうとらへ

く物よひしをぬきまゝとせり流下れ
又さういふ事よとてぬきこしとせ
それよとせらしとせりこしとせ

右大納民の御事とせぬかまゝとせり
月流ふよ

井 移人しつたなりと

何よさくたがま〜月流の伴物流
あられ〜思ひすへ〜あまはたがな
〜あ〜移人しつたのな〜とせり移人比

乃公といふことと伴物流天祓を色
小あまき〜とよの字に濁て君とせ
月け物流よあられ〜ハ何よあまあ
あ〜とせり〜とせり〜とせり〜とせり
とせり〜とせり

とせりい〜

何とせりあま〜ハ貴殿様と例に詔とせり
と色代とせりゆめとせり〜ハとせり
とせり巡流〜秘河流とせり〜とせり

とれいとみくらいふいふいと
あまふらえ

をういふと何ういふれいふいふいふ
ふふふ

別よきうすく

早下乃河と垣下は人むらと
半ゆり大郷食うとあとし人殺の
れまうりうりうりとあらし人
あういふとあういふとあういふと

ぬと郷此ひ音さうつりといふと
はとと垣下といふと人殺の

といふと
此事十ヶ条と一くたかといふと

我身といふと早下といふと
何うといふと垣下といふと大郷
と垣下のと郷といふとあういふと
いふと人殺のといふと
下乃儒者といふと

月経入る事こゝ成る事と云ふ公也

ひらりふゆりふゆり

秘 氷者よゆりゆり

かくるりれきりしと何の事なり

秘 大子の流乃初くちよよ人の世なり

よとよとてはたわきよはらまら

きほりささりりりりりりりり

大字乃流れ初く一候しる事なり

小大の民りりりりりりりりりり

あしやうううけりゆり事あり

まふまといふんきりりりりりり

乃征とよとて何なり事なり

一美しきりりりりりりりりりり

よしてはたわきたつらまらりりり

乃流るんわいさ

るりりりりりりりりり

何 儒者といひりりりりりりりりり

とこいをこゝあしりりりりりりりり

かほしよもてなせほよんて
海く美ふりといふ

人々がふりひて

秘 多ふりていふ

かろりふりいふ

又なりのみりいふ

秘 何 風俗方乃詞也

なるいふいふ
いふいふいふいふいふ
一歴といふいふいふ
いふいふいふいふ
西宮託云有政日夏并就結政如常上
卿入外託官

常唱鳴高

井 何海風俗鳴高
或号乃詞といふ

不才之同云飛鳥鳴何文をわ一谷河海
よハ不見鳴きよし云事ハあり
或は云飛鳥高鳴自用之後くせと
物ありにとるこくゆりよらつて度と
多てとせしこく初くせく物あり儒
者れ肉し乃やうにとおかせしきこく
いふくトあり

私此事不用之

さいとひきいてあらしうびおん

^何 鬼夜退きゆみんとく

^秘

何事と何事とわらよまきこく事
たふかへとありーぬうくそく

見ありし行つぬ

大季乃道よいぬん

二乃道よりいしてあらしうか人あらしめ
儒業より立身れ云柳をいふくをたて

きりりふなりん

ふみぬしきぬと

夕雲と大雲のなまふりすとあ
みさふしめしりりとほと梅并

や

物いとしてとせ

たらしめしりんと

ふりげりとしてとせ

秘 無礼りりとしてとせ

ふたへはしきとけらえんむりかき

ふゆりかきりゆり

何 揚子 大影 猿樂

私 ひりりきとけらえんむりかき

ふらし作法り物まはるしむりか

ゆらりすりき

けらえんはらまきぬまき

猿樂はらりきとけらえんむりか
半とまきりひり物りり大雲

元原氏の源よはておよびく
おこちあよるくありて
或御説よ右よのよとてのよとく
かとしくま事らとてのよとて
うりいぬとてのよとての言のよとて
と也

とてのよとてのよとてのよとて

儒者乃末くし門生未也しとて
ほうふりあさりゆりきとてのよ
とてのよとてのよとてのよとて

畢弁克

おとといと何きれくくゆふもく
けりゆりてかといふれと

輕慢詞よけりゆりてゆりてゆりて
とてのよとてのよとてのよとて

あまれの何さましり大者ともて
ふゆくけさうハ假粧之けいせり場
らふゆく一むきまんとゆりて
まんとゆりて假傍之人よとて

教所、まほりさな

定まらぬ教ありて、一徳ありおのふ
ゆよふふとく、と美しきまじし
まほりさな

かへとほりさな

秘

ほれに恕ありて心みあり

しる物多まじり

別ふとつよむ

おとそとほりつらむせらぬ人

を

女メ人ヒの 秀ヒ文ヒとヒみヒとヒ并ヒさヒいヒみヒと

とむへ一物

私事とてほりつらむに、
私事とてほりつらむに、

私事とてほりつらむに、

ほりつらむに、

私事とてほりつらむに、

私事とてほりつらむに、

私事とてほりつらむに、

私四韻、八句、約也

何花才被人知 以名爲韻

中書王 具平親王

年齡稍邁減詩情
被誘鄒牧一旬城
應笑久松風月賞
桃李之外名花名

江以言

春天花木富芳采
自被人知得擅名
何処未兼霞養色
誰家不審身呼色
白同唐帝專房女
粧嘆秦醫一里兒
莫恨翰林零落士
西園今日接群英
近代 モ 則如秋意宴座序者四韻上卿

絶句ヲ作事也

けりあうぬいのとくさうりて文章情ほぬ
てまうり

五 翰林乃人の出題とくさうりて韻字ハ切韻
として何字とくさうりて韻とすうりていふ時モ
何り題中よ取韻と云て題外文字ハ
中平声乃字とくさうりて韻とすうりて
あり又何韻としてモ作者ハ公由とせよ
とら事とくさうりて

みうきには乃束るれん

何

日月の比を上に糸の比ト云り

秘

日月乃束るれん也

在中辨か〜〜つ〜留つり

并

無先祖

秘

系圖乃外れ人々文章生らり昇を

とら人々へ〜あり公ことなるるを

たりのきり

在中弁乃中といつらにぬ〜

かぬぬき家よじまれ約せういりる

い〜にのり

又弟れ事や

由とれほらうとしらひ枝乃雪となじ

行

秘

〜ハ割し

車胤孫康ハ家貧カ〜〜ゆなきは
螢雪といつらき〜漢者れゆきすの

羊羖よりのみれよふへきいり方よと身よ
くろくめ子同く流るる河のよき事
枝乃雪の宮れ堂よ射よてその河灯
よとく九枝よその長河海よその燈
くすくすよその枝よその海よその宮
如く

河
晋車胤字武子河東人也好讀書無油
夏月則生絹囊盛數子螢照書後至
吏部尚書

孫康家貧元油常映雪讀書後至御
史大夫枝乃雪と八枝ハ灯之九枝也云
リ雪ヲ灯ニ擬タル也仁王經云佛告
大王忘作九色幡長九十色華高文
千枝灯高五丈

太平御覽卷八百七中部中記之若虎正手
會於殿前設百二十枝灯以鉄為之云
西京雜記曰高祖初入咸陽宮周行有
車金玉珍寶不可殫言其尤異者有玉

月玉五枝灯高七尺五寸梁王筠燈詩曰
花耀九枝 傳言朝會賦花灯燄百枝
煌々是等皆灯ヲ枝ト云也

私灯ヲ枝ト云事河海説あるに
羨むて終へ

くしと

圓每句款

おそくの所ん所なり

^秘源の所なり

河 ^何 所なりと云ふ事

^私 所なりと云ふ事

なりと云ふ事

私に何れも云ふ事

所なりと云ふ事

めなりと云ふ事

女 ^秘 所なりと云ふ事

^秘 草子比へ

しらげと云ふ事

今日凡孺生在学习各以長幼為序初入学
皆行束脩之礼於其師各布一端
是喜式云凡游学之徒情願入學不限年
多少ヲ授メ加簡試其有通一經大ニテ聽大ニテ願大ニテ至
但諸王立位已上子孫不煩簡試在ナラ
束脩乃禮之論詰述而篇少也自行束
脩以上五言未嘗元誨也 凡為之各也
と乃と〜と也
寛平八年十二月十三日看世親王入学

秘

何

當日早朝召文章博士紀長谷雄卿自持
名簿賜之長谷雄拜拜親王奉堂

儒

二世源氏歴儒業例

源仲行

從四位上民ノ大南東宮太子

同俊賢正三

大納言民ノ卿左大臣

高明男

俊賢卿例在叶今例也

又執政臣歴儒官例

忠仁公

天長五年因三月甲午任太子以于時從五位下

やそて北院のまらひ

二条北院より曹司付りて学問治之
文章院中、有東西曹司撰北院

私云北院といふ二条の東院之入念まて
まゝとて一々穿とて北院の里に
ろとて事と傳はまてつを治く東
院より北院とてみ治く北院の
并北院より一々穿とて
大宮のありし

夕穿乃祖母

ふらうけり

^秘 弟子地く

北院まてハ夕穿大宮 三條宮よたつ

まこと何まらりけりけりけりけり
学問もあまうまきとてかくは志治まて

一月十三日

大宮より北院まて

けしこまらりぬ治て 何集 日卒純

夕事乃何之

殿とばしるをたつしはとふ

夕事此はよはるとかやれやうめはふ
とほしく思ふ

大され人かゝはあやうに

秘

夕事く実こころ心よはりて字
回よをと入てそころとを

孫ふとや

ヨリキムキ

秘

夕事月乃ら

并

よはさし月と心へを

史記よりみハ

河

史記

馬遷作史記集解

本紀十二卷表十卷

志八卷世家亦表列傳七十卷都合百六

卷

抄内八快ワメテ
為八十三卷

西京雜記云司馬遷作史記二百三

十卷

金樓子曰正仲任言夫説一經者為儒者
傳二言今者為通人也上書奏事者為文

人也能精思著文連篇章為鴻儒也若
列子政揚子雲之列是之蓋儒生傳為
通人云傳為文人今案宋文人擬生八擬
文章生上テ文章生擬スル或擬進士上云
い海ハ臺試試一一ううげげるるんんととままららりり
いいままくく心心みみささせせ給給ふ

秘 大字寮上ノ乃試之大字寮上ノ史記
とらふとらふ一一ううてて進進級級とと同同一一儒儒士士とと
上上ららひひらら事事ヤヤくくりりくく抄抄小小人人ととり

弁 寮試事 宗祇同一答字之奥注ス

七 是ハ寮試りききささせせんんととままららりり
一一流流小小事事ををししりり字字生生とと大大字字寮
一一てて試試とと寮寮試試とと云云試試ノノ史史記記とと
よよ海海一一ひひららくく一一ううててままららりりとと擬
文章生上ノ補と擬進士とをいふ
弁 擬又章生上ノ文章の業生同事一答
大字寮上とてらめり字同らるる
試ノ乃考をりといハ文章得業生といふ

又昔ハ諸國より文人と云ふ真よき者
有りそれとハ真士と云ふ進士と云ふ
まこと大志を養ふと云ふ試よ乃才せらる
擬文章生ると云ふ曰半れうつりと云ふ
凡^{心志}儒業と云ふと云ふ人の志才なる
ふハ先補大志生灯燭料と云ふ九年
なる量ればと云ふと云ふ功と云ふ
は大学寮と云ふ試うり史記と云ふ
と云ふ跡後と云ふハ条の中ハ三条通

すりと云ふ才と云ふ則文章地業生ふ補
と云ふと云ふ又擬樟と云ふと云ふ
ハ七年と云ふと云ふ用と云ふと云ふ
と云ふ同字同てと云ふ或ハ有と云ふ
試と云ふと云ふ詩賦と云ふ次業乃文

^{并祿}第乃文と云ふと云ふの事ハ
策の又と云ふ儒業の一大事と云ふ
同者乃儒士と云ふと云ふと云ふ

の事と對句よかきて不審と云ふこと
獻筆此人てよ又對句よきて禮文と
引て答るるべく等の又ハ中朝文粹の
才三美よありされと披見ありて
を文脈ノ邊 荷これしよ秀文進士れ二科あり秀文
とハ方略といふ方略ハ無端れたるものと
いふべし
方略といふ事れハ不審なる
答あやといふはれ文章得筆をよ

如らり人よよく方略の二字ハ無端の
大事と尺さうとがさうもさうと事
よく進をいふ擬文章生よ成らり
人
献筆乃時ナリニ題よさうてか事
いふあり大事と

并
其筆同題乃あり
其の句題さうとと文粹よませらる事ハ
或ハ神仙或ハ神初鳥歎言詔運念大

松平かやう乃野付しこれ事と不
審すり事く凱八時よきさうひてを朝
たふりる也

を士とく時務等と云今と云書に
みり

并 此美也

昔八時務といひて當時の政なるを
といふてふよかりと云と同義事と
又よかりてこふりく或又方思乃

宣方とくり方て秋等又ふかく

りそんそん

死

今乃世よハ文章得業生二命あり考
文はありふり一欠りり給料と行
字印一り人くそれハ方略乃宣方
とくすれて式有ふて課試セ
ぬく

方略宣方也

進士乃人方略とかり方事也

又入孝乃流の中一窓ある時博士これと
奉事とれハ大子寮とて試て文章試
ら何し心乃中れ人と擬文章生補
と教女人あり乞と或る者とて試て
詩とハ賦とけくし心乃中れと
文章生補とこれと進士ハ予或を
以前とて勅額と下しして試らるが
あり文章生補とてねるハ方略
ハ宣ふと蒙て課試としく半ハ

何れ進士ハ時務第よりとてと方

略の宣ふと蒙まハ方略ハ試し

并得
其意ある

一各よりりし

文章生此方略とてありて試第

事ハ南嶽の時とハ外國ハ極必ら

時と教位の時とハありて京官と

何してねハ不試第とてひ

同 并得
南嶽とハハ試第とて京官ハ

行と作すて及中一経て進士と成て
厚くして約位より行り

何
寮試作法

寮頭以下各一員博士以下各一員系者
試廳出貢奉交名未博士加署渡寮頭
見之下允以下以毎更三合置試衆座前
人以讀書未置頭博士未溜試年試
衆等前次第召試衆抱夫進出慢門
下元御云版尔試衆揖而就版元而

居尔試衆揖拾及居下脱坐者座置伏
並頭仰云冊衆唯而探冊三吏之間今因讀冊膝行置
試博士前試博士對寮頭云史記乃中記乃
卷世家乃上快乃立乃卷下快乃一乃卷傳乃
中乃快乃七乃卷頭仰云令讀与試衆各披
快抱卷川音讀之頭作云古未天試傳
士對頭云文得奇頭云益注入寮章捧間
称注由之試衆退出室盤お慢門外仰登
科酒者中

まこれ大物

夕雲乃とら右大物

^秘 原の山おきく内このころ

左大井式了大捕左中井

三人系圖よみさりや

くせれかへき

^花 久ーおりくき

^河 論語云言可覆佳覆摘復沛書所モ

覆勤トテアリ

因少一はよハヤ一カ一不害と全

かふくよより

又照乃うハ流通しころ公成

或ういん説とありハ解りい説と何

ことやかきとハ音と訓と

私此義不審

ばまきろのうと

何
つまきろのうとすといひるれ
る得奇なるに合點をんとして
してあると外り事といひ然も審
と合點は擬して今乃内は
中まきろのうとといひ一説云角筆
角筆といひ假名付人といひ
乃言は角筆にしてまきろ假名付

秘

あつれ極き証なきに取しては
よのし新筆爪を
既し何事とも只これなり
してと筆のまきろといひ
い成

弁

不審なりあつて
ときふとてりうといひ

あつていふ

秘

此人はたなれは入初といひ

思くも

大ぬまうし

とらの太ちねハ御してくはて程又故
折改乃れをせしむらうはくし
新しんとぬほひりま

殿とえん心ばり

源

人乃うしきてかこくあひし

源の初

言乃れ心くおのんす

白れ六毛よ思ひうらう

白れつひうとあ

白れ中毛らとらひはら

白れ中毛よ其意の心ら

白れ世やうとらうと

白れ世やうとらうと

白れ世やうとらうと

白れ世やうと

秘 我うたけしは川音世やうに

昇 くらやうに

川音日 美

山法もにあうさむよ

秘 美くやあつち

それうと心むけし

秘 美の詞文此ゆるし 結りて

りし

かの法ありてふ志さうひて

美 白うあへ同たひてう此法をさ

めて結りし

あひあありてふうらむ

美 六君の事ゆへそむさうあや

あらんおあつし

しうすく人あな

美 萱の好美あなむいむとさう

了り

物あさう形やと

ら

とらいつともゆきと水や世中と
うーあうこれ我身とさうん
秘 薫乃の中にも思始すらうと連
くあつこもかひは奇丁乃んか
早 さめろえ

集

とらいつともゆきと水や世中と
川吾曰

りのめーい

集 薫乃のらと風流めと

いしうろくくさくさ

中吾のゆえ

ゆいんらとさあまのうーく

秘

中吾の祠

さてといひらうり杉のーあひ

アまふり

秘 川とめん乃さうらめてくの

夕つり

集 道の草の字法此屋と

志願一入るて

^妹申書也 九月あとも

侍つらうのや

^美九月上旬

あに世のゆきあはら

^美白くふるる

私白くけりい

きと如くし

力成可保と

じりしむい

^美大なる

女さうやあれ

^美申書也のあはれ

しる

そは

川入るよつ

るる

あはれ

花

あしきやいふ花よ事よあし
すわのせく思ひこころよあし
宇治のよけの花はさね
あれしそあなこころ
さしそあなこころ
りや結ゆんちうくよけ
あしきやいふ花よ事よあし
みよのゆへに
中よ事よの初よ宇治の

翠

事よこころよあしこころ
らめるは世のゆへに
あしきやいふ花よ事よあし
中よ事よ宇治の初よ宇治
るよこころよあしこころ
あしきやいふ花よ事よあし
あしきやいふ花よ事よあし
あしきやいふ花よ事よあし

あもそひゆー志のつれなく
そり

いへす人さむ佐もさす

申君れむ

志のれ外ちりけふ

申君の祠

すまーいしきりいのあは

葦の祠

いりーいとおほーいさふりー

^葦昔うのゆーのあのみ

るのー人乃はゆー

^葦大君の

月あられくやー

葦の四中よつひつくる

せんるれくさふーいさむ

つね也

申君の

かろくひまにーゆ志しゆん

秘

中々此句也

こゝたやあれは

甚しの詞

つひ〜すら〜あけよあはら
くら〜

中の甚れは海へ甚しの心し

み〜か〜のりも

^美じ〜れそひゆ〜の時的事

く解〜さあまき〜に秘なるはさう

何

そ〜つひ〜人々〜あはら〜

す梅〜〜と秘なるはさう

^美川号曰秘翠川号ナシ

や〜〜志〜あはれ〜

なわ

ら〜〜は〜ひ〜女房

つ〜と志〜あはれ〜

うれ〜中君あはれ〜

〜

じしつにあらうか

^美じしつにあらうか

事らるるり

乃塔恵るる

ふのすこい

^秘るる地

何とわくま

さしてく

かいる地ゆ

^秘葉のうま

^美此村のあ

おん

^美懐妊と

し

乃

^秘懐妊の女

^美懐妊此

を

美

うさひて逢事のふかき

まーさや

さうくおしよ

隠ふ葦花のうらみ

新曲あり

さうれとこのよと

美

はくくおしよのふかき

せうれすあーさ

すーらうや

申君のれら

ふからんあはらう

そひら

美

面うけをらつ

是のうらじく

宇治のいし

申君の宇治

志ろふ

美

かやうに申君の

ゆくり浮舟事とらひあ
て中志の川合より

中志といふは河に女は流あり

葦より中志へ

いづつ〜りふら道の落し

昔是ゆふ枯のえり

葦と〜や〜は事いあつ

じ〜れうひゆ〜とあり

あ〜

いとり志〜あつ〜はれん

あ〜〜はあゆめとあ

いづり志〜あつ〜さるん

川号〜も

川新日

うけ〜白〜

也〜り

あ〜り〜と〜れ〜

葦のゆ

すきり世中とてあり

^美中君のさゆ瓜菫のさつこ
ふんそ

いりよふいとねほしむらりて
^美菫の若きいゆりあり
さるくゆき

これえりれそそ流ひれ
白文の中あはれ

あつとそそんやまはれさばり
^美これとぬれり人よあはれ

おりそしきさそふえあはれと
さふそ

さつり心あはれに

^美草あはれ

大見人の所があしさい

^美大君のさ

これいよりけあそさひめくれ
あはれ

家

大君の事い大いこふしきぬあ
り道りりせ是のいぬく乃事と
あし事よさちりし
ふしと意のいれ
えしとせりいぬし

家

白乃中君いありいりし
うしろとれ心いりせ

意の中君とうしろこりれ
らあてい大いりてはし

白文のありいりし

しとせ

何れ心いりりさぬせ

秘

中君白文といりみぬ

いり

白のりいりし

家

意れり

いえをわほらあにまうせ

何

いれあしとせりぬらう

あれからなつづつ人の

^秘 蕙の事

この蕙とあれを今と
うに暫く初めはよく
運ぶとあれはちまの
と思ふはけいふは
なれと今これより
この事と今より
よし也

これ西ゆくさの

^秘 立るる人の蕙より
行末とこれれと
たゆめくして入るる

よ

^秘 蕙の人の事

ゆじあはゆり
そりあはゆり
大君の事

久しうくさへ始らん事

^秘 白文のうさへ

^秘 白乃とてえおあく

道ひまみしとて

よ白紙のまらりす

申君のしる

か乃人れうり香

蕙の好香

うれみらの人

^秘 高れらるる

うれく又好文の

事しるる

いとくろしと

中君のう

さし進のよ

^秘 句れ

むと人乃西そ

多れん

^家 抱ふこゝむさくくつてあや
みくは

乃こりあつてと何

句あつてく

んくあつてと

^秘 中君の文 ^家

とさあふあふれあつて

^秘 東ふあつては升あつて

后ふあつて

^舞 さだよのあやうよ東あつて

あつてあつて

^家 さあつてあつてあつて

あつてあつて

あつてあつて

あつてあつて

あつてあつて

^花

あつてあつて

し葉中君の我を六君より
さればじ人られ侍らに治り
あつるあつらうらそむじまふ
るふ事く

并

川号曰此奇れんあやうおを
あまめあまうらうらうらに
うらあまうらあまうらうら
ふらうらうらうらうらうら
うらうらうら

松

川号曰我とてあはれあ
らうらうらうらうらうら
あまうらあまうらあまうら
うらうらうらうらうらうら

松

葉立後の事なるはあまの
あまうらうらうらうらうら
事の別しうらうらうらうら
中君の我方のうらうらうら
まうらうらうらうらうら

まじりぬとみるまじ

花鳥の儀又秘の小去り首る

川号曰らまじれらとさらぬよら

そ彩さらあら人あらぬら

さらぬよらあらんあらぬら

人よらあらんあらぬら

白らあらぬら

白らあらぬら

あらぬら

あらぬら

あらぬら

あらぬら

あらぬら

あらぬら

あらぬら

あらぬら

あらぬら

あらぬら

箋

ら

秘箋の箋に用く

又信秘心秘とさらふらりら

くらぬら

物とさらせ

いづれにわさへいと福うて

白の福さもうしくおのす

中素いじんまうそあつ

又人よるまわら神めうけふ

我もあゝ笑て振つうれ

ふれわら神ふんのおく純熟

しこのまうく一旦乃事ふあ

ととゆくうひらふあり申

のこく人そいぬけい

石可及

いづれとそ

ふまふとあれとそあ

らんといふあれいづれ

見るまわら中乃あといの

うらりあてやけいあれ

かりり者よとそい

みるまわらあまふれい

うらのかくうりくそれと

秘
しよきくすり

うらりうらりうらりうらりうらり

此舟も又大やうらりうらりうらり

夕うり 笑

笑
是のけ事とらうらりうらり

あうらりうらり

うきうきうきうき

秘
かやうにありうらりうらり

一まとい

笑
句此句

うきうきうきうき

句の中志はあめうらり

句よきうらりうらり

笑
あめうらりうらり

笑
弟子此の評は

うきうきうきうき

句の心よきうらり

うきうき

又此目と心のくらに

白のち申り給て翌朝のさうじ

此志つゝひまもさつりくやく

六君の事秘これめうけ

中秘も秘

る人秘こもくうらまう

是の蓋上のさねん秘とくう給

と来よくくさるめり

この晴く秘ぬねよめ

あふ也

君秘あつれ子秘すま

知れ秘雲秘つ連秘めて

君秘の中秘あつらひ秘

う秘如秘昇秘

何事秘し秘あり秘

六君の事秘白秘文秘心秘

さるく秘まよ秘知秘れ秘

さしりちる人の西秘

六巻のりりり

くらくらあきありり

くらくらくらくらあき

心うらたうらあきくみ

くらくらあき

くらくらあき

中巻の折あきくみ

くらくらあき

くらくらあき

くらくらあき

白巻の折あきくみ

くらくらあき

くらくらあき

くらくらあき

くらくらあき

くらくらあき

くらくらあき

あきくみ

是の中君のさ梅と云

あれとくうきふいあわぬ人
りけらくこひひして

兄中君とよみぬ人のかおれ
ちつさよりあはつてあ

まりえ中君の西よえとくう

ちうみみつこくむの

御厨子 小唐櫃

いとくうのそあ

薫と中君とくうとくうのそ
あつと白とくうと

かのんかきとくうと

薫のこつり 菘

その目とえいそりん

ゆりとおとつて行二条院よあ
すうと

六条院よあゆきとくうとくう
六条の西よえ

いほりかゝるははのふはのふのふん
こつふやくむんともあり

^箋

中君は官女乃ち君人此の志
けささとそくあり

ことりありし中

^箋

句此二条よあつり事と意の
んよ何とせん新こま〜さん
あり

わのふりよこま〜くあり

そり

意乃ちる〜と〜と持く

^箋

うろやと〜と〜と
中君の為よ〜と〜人の
やうのふ〜と〜事そ
とふひ〜と

さのり〜と〜と〜と

^箋

意の〜と〜と〜と
中君は〜と〜と〜と

一々とや 箋

んてれきひさしの

秘

中君よりさうなぬんをのこ

解りまゝ

母文乃西ころ

兼乃母 女と又

まのうん月のひさしとれきよ

女と又の詞

并

意の道心すゝみて八條をさ

たひし事ありさうなぬんは

事とけ九月まゝしりし

給ふつゝ事とんころ

秘

九月の安月あれはのほ

箋

大君れはの事とあり

お美の美や大君の霜月

ようせうつうとみるは例の

うん月のは事とあま

正五九月まゝにゆあは事

らや

あにうささく〜

蕙の初くまらさし深きう〜あま
つらすくもてつらさく〜とてさき
う〜のねくあく
う〜のさあや
う〜のさあや
う〜のさあや
う〜のさあや
う〜のさあや
う〜のさあや

秘

中志此の料也

昇

系

中志の西出〜あま蕙乃きう
あ〜てあつなうあま

さ〜ぬのさ〜るりけつよ

蕙此きうのさ〜ぬるきい女のん
るあ〜ら〜る〜とて

花

あ〜方〜の〜あ〜
引〜の〜

ひ〜い〜を〜あ〜と〜か〜下〜を〜

一十はねのね

腰の骨をさしとんぬる事なく文よ

の葉あつておのりまうけり事

とて我身もあらうしむいひ

なりし事

一十はねの腰の一はあつて

さう下れぬの葉と形の葉あ

らう物あつてさういふ事と白

ゆりし事とさういふ事と白

我身も此事とれ申意と

らうはねのねとさういふ事と

面白

大捕の君とて

宇治より東へ出り時音後

人死

しりあつてぬさ後の

葉あつてのりもつる事とさういふ

つる事と此用意あり福の結梅を

らねとや

所^義もつりのい

中^義も心のまうく

所^義もんとさ接し

句れおつたかあゝ中^義もみと

まゝぬりや

つこの事^義もてりあれや

ま^義もつりかやうの心はひ細の

事^義もつとや

んよとつらじやとや

大^義も心の中^義も心と

んよとつらじやとや

とれくさぬい

ま^義も心とありとあゝ心と

れま^義も心とつらじやとや

ま^義も心とつらじやとや

ま^義も心とつらじやとや

ま^義も心とつらじやとや

とく—さああひあひあひ
ことと 掲票 イチシトヨム

何事とく—ろここ—

^兼中君の心あつらひ人
あつらひ—

^兼中君と誰か—
宮のとろあつらひ—

^兼白文の中君と誰か—
ろここ—

ろここ—

えんよそ—
^兼白文心あつらひ—

^兼白文事 兼乃事と誰か—
おろす人の—

^兼平生の心あつらひ—
一はよ—

^兼中君と誰か—
中君と誰か—

秘

白文の中悉と一版と
わすふよりてこそは
かみかみ

いそやあそそりけい

花とつりあそめれと

文のほろろとれと

るやうふろり

秘
不足はろそめれと

と

とつりあそめれと

是の熱別とれ神成り

中成事とれと

よそのさそめれと

る事とれ山里おと

いそやあそめれと

はすまのわあつす

くやうくわす事と

ましてこめはる世り

多岐

六五此亦くさうり 養

中書ははらひのく白文乃
所教人なまもくくくくく
らんとうりくくくくす
うとうらんあうりもみくく
くくくくく

董の中書のみとくくくく
くくくくくくくくく

備公命さあうりくくく

くくくくくくくくく
法白人の目くくくくく
じふくやあんとく用捨也

くくくくくくくくく
あまのくくくくくく
くくくくくくくく

またり

あわのま

後料

糸事

後と織つゝ糸料へ

花まきういとういんの事へ

あつちうしとそまあまむねりら

うし給す

意の事

糸

白よちうす栄耀の人たり

これみこの山すみ

八宮の宇治此山里は後

うひし事と意のみあひ

うひてうらおひなりら

うさ

いと行のんあうりやとそ

あまよあうれ給て人あ

あまえくしあまうとあう給

宇治のまよりうひし新

おぼろけとてしるるまゝの人乃
くめやとおしとるる
事とて
事とて

作者の評へ

ねやうにふえくよつひ
こと事れあつてり成
多よハ多あつてり



かくて
かくて

秘
意のゆるり

意れおろし
君人こころれ
るさつやとさめ

日
日はあつぬ人あつ

秘
中君のゆるり
り

さばらぬふあせり

さましとれふふのまゝの中悉く
兄弟あとのやうにふらふに
ゆかりあゝあゝ又夫婦の
同あてとちとてあのみまひ
うら／＼とさばらぬれは
ち也

あゝれとあゝぬま

まゝれあられるふのわらへ

ま／＼とあゝぬま

まゝあゝぬま／＼とあゝぬま

まゝあゝぬま

新糸のふらふ

皆新糸のふらふ

／＼とあゝぬま

の中乃君のふらふ

ちり

みるまゝとあゝぬま

昇

あつらんし心よわくわく

山影よおれてこころひらきあは
らうらたしと

おとせしふけ人しる海ら紙

大君れおらせは 萱乃中巻之
心よわくわく

これ事いとしくおわく

白文の心れくわたりし 萱の
心よわくわく 中君

心よわく

れしと君し志わくわくし

萱之

をくわくはは志し

いよまあひしりんあわくわ
くて 菌とくまへ 萱印之

あみこのあわくわく

萱の心

あわくわくわくわく 僧をくわ

^秘 傍の事か持まよの計の事く
^秘 甚此視醫商師傍まよの類をて
物乃まよ一え

ちろくく——かりく——とみし今
乃えん

取めれまよのざん

^秘 加持の傍く

か持すりく成取居乃傍く

しそ

母屋の外いさく——

人乃くしよまきりえん形も

^秘 中君の心持揚く

まらえん、揚家こしりく——

人乃不富れ、けりくたれい

て對面——

しそく物のまよまらひ

意乃心申悉れけり

ひりれ人のちんまよそめ始りし

大君の事此より出づるよし

くくくく

あれくくくく

一よれおのこ

いしくくくく

わめて

中君の心

少ねしりり

少將志とそはよき



ひのこくくく

けあこあくく

くくくく

蕙の詞

かみゆりまか

やま

氷よりれも

あきりり

昇

下屋すゝぬの中君れを
みる

中君れ心とる由君れと
あまの心とる由

私りやとるぬの君れの
とる可然く従ふ川奇

及らる

ワれ心とるぬとつり

君れ心とる

人よとるぬ

懐妊しそる人の趣とる

とる

初とるぬ後とる

とる

いととるぬ

懐妊の事とるぬ

ひの心とるぬ
君の心を

秘

中々此若のんてさの大君

あり秋まりさ人乃十りささし

美

大君も胸をやみあひし

と氣ろりましさ人のく

と人のいもし

きたきしれしおとせの松さるぬ

河

うらま世れふんりさるぬ

秘

流しおとせの松あうくに

川号唱 兼川新日始をら

奇也

五

川号うらま世の

流しよせしお人れさんとは

まうはあ

秘

あねうり

五

流しよすあし中君うりれ

中々流やうよれあひし

か

美

乃所々をとりま

中々心えまふをうにわか

一、まゝ也

きにありのたつここの山とくくはりし

^後あつちの心よりいふあつちの山とくくはりし

加こりり思ふに

おまの山とく

^後大君より

いふけささるきし移りり世の中

思ひてあつち

^後きよの初

^後きよの心つてもあつちあり

うといはれ物うといはれ物

^後三平うき物より三平とく

字をいじむる古事下り然

しに非はれん合廻り下り然

とあり 河を平にきく入る下り

^後後

大いふよりいふけり然

一、まゝ也

か乃がいに此に——いかにいかに
——よきん

大君よ公の事——よりよき人
道あるものには——いかにいかに
おしくさめりりりにいかにいかに
あは

大君此にあられ——いかにいかに
あは

いかにいかにいかに

大君よ此に事——いかにいかに
いかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかに

大君よいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかに
いかにいかにいかにいかに

よのいかにいかにいかに

業業の真はるる事く

く死死死るる事く

た死た死るる事く

ひるり

く死く死るる事く

中死中死の事く

中死中死の事く

た死た死るる事く

く死く死るる事く

み死み死るる事く

業業の真はるる事く

事く

く死く死るる事く

た死た死るる事く

く死く死るる事く

く死く死るる事く

の事く

業業の真はるる事く

いさなり 治人とは 公家のあつらひなり
とりし 公家事への ちかき事也
さやうの 事として 一度の事
たふらに ちかき事なり 公家事との
ちかき事也

こ乃 治山さとして ちかき事なり
かたじけなくして

治山さとして ちかき事なり 公家事との
ちかき事也
さやうの 事として 一度の事
たふらに ちかき事なり 公家事との
ちかき事也
いさなり 治人とは 公家のあつらひなり
とりし 公家事への ちかき事也
さやうの 事として 一度の事
たふらに ちかき事なり 公家事との
ちかき事也

松ヶ谷 義方
治山さとして ちかき事なり
ちかき事也

秘 かつらうしんそふそれと山里
の西風ふくその如く建しと界
はらんし走らむありて

秘 等 それと心安くそらしめす
る建しつとよらうに心あす
うれしきとまうまうくひひ
しと也

秘 山ろくつてくく
秘 庭の山あし
翠美

秘 二葉院の庭は山也
とくまのくま

秘 かつらうふあつあし

秘 川舟はる回し
あしとれつらうふあつあし
ちりせいはるはるあつあし
さしと

秘 音ろくしとれつとれつと
秘 慈徳の秘伝はるあつあし

元 かつこちうらん音あし此里
純淨國の名をかくとあり一川
とてあり

秘 川号は日昇日宇路の山里
るは成るよとてのまよ

兼 川号は此号三四乃句は
ぬふく意もひぬ都るも
とるにあんはけしき
ぬあよくよあり

か 此山さしのも
秘 宇路へ

兼 宇路のころき成音あし
里とさしあり

じ 一もあしありて
秘 大志此事へ 兼

兼 一云んや昔此人乃かりおと
あきあり 見河海一兼あり

いふ心く

白氏文集曰香炉峰北有寺
号遗爱寺件寺者高宗皇帝
有寂爱王子至七岁忽薨死不地
哀俊建立立堂舍王子形安置其寺
草堂記

畫図事漢武帝初喪太子史
人耳泉殿裏令寫真丹青畫
出竟何益不立不笑然殺君

白氏文集

彫刻事武帝以薰中君李
丈人欣作以温石

あられおりの紙糸ひい

^秘中君の心く

私中君心く

^多中君の心く

又うさそめさし川らうさそめらう
人うさそめ

ら

秘

花

恋を〜とみうし川よせ〜御
 祓はうけとをあよき〜
 人歌と云ふははまて〜恋
 ぎ〜うと〜の紅ろ道よ
 孝と入事〜川号日
 若おかゆらん〜の歌
 つまて〜川の人歌
 ちよせ〜恋と〜
 事とあれ〜川号日

うり〜人〜川号日

しのみ

^舞恋と〜川号日

あ〜心〜川号日

私歌の美

舞

後の人〜川号日
 ぬ〜川号日

おのりじふあしし、おたし
ろめくそ

^秘昭君、あしくあしく
てしそ

^并昭君、しししししししししし
まのし

^後是の董の給、しししししししし
し形とよくしししししししし
似す、曲しあしししししししし

かしらんしししししししし
ろめくしししししししし

^ら董師云漢元帝宮人頗多掌
令畫工圖之有欲呼者被囚
以召故宮人多行賂於畫工王
昭君姿容甚麗元所苟求工
遂驗其狀後匈奴求養女帝
以昭君充行既召見帝悦之
而右字已去遂不復留帝怒殺

畫工毛延壽

杜詩注

うよそ此多くみしあしはらて
ふ心よふくあふへん

秘

不言不笑くさらの心とあ
るへしとてくくつれし中
君の心あつて

ちう来世し花かせふのく
みもゆりけつ花

の

むさ此多くみつ事とて可動

付 花彈道

花

水原云むさのくみは母れあ
うしけつ女成しとてひて
く成はくくしりきれあつて
しあさわりのたひけな事と
ゆり或流云むさの多くみと
くしりしに花成るをよりと

并
御みて花畑へ移りてあり

秘
三月廿日 花鳥

秘
神変と現しりりあり

大なり

秘
る民人の可なりとせり事

あるれされらみよ思ひ

いますしりりちりりりりり

て

秘
中君明り

秘
蕙の深切小大悉此事と乃

多々心くくくくく浮舟の

事とりのおんとく中悉此

ちりり居たり

人このは升てよとあり

秘
ちりりりりり

中悉の初

秘
け治りり人乃志なるは

おらり

昇
萱よかりき
さまと心
と

花
手習君此事とつひおんしとて
人このはめをておとつり昔
の人此きくひよるひふれハ
さううーろよらひあー落て
萱のつ絲りし何くーさう
とさあくまよとひのつとんと
さうさう

うまうーくあつれめ
萱のむん

これらうさ人此ふんよの

松
かおん 羨

さうきくくりてあー

中君の子成うー人そら成あお
うー志う張ーとらぬよ
ー如く

うーころの昔ーやあんとも

中君の詞くも習君此事と
かうりあーはうり

糸
くはみ乃事く

多つひつていふこと

昇
申君のこころいふこと

うつくしいまじきれと

糸
子服のこころと

うつけよじつひのこころと

糸
服のこころと

あられよおほくさうあ

大志よいふことあられ

成りゆく

うつくしいまじきれと

糸
申君此我よりいふこと

よ似たり人ありて申君と

うつくしいまじきれと

昇
申君此我よりいふこと

よ似たり人ありて申君と

うつくしいまじきれと

あられよおほくさうあ

船のうへに帆をたて

あきまうしとていふはさう

花

うりの字さうりしとていふはさう
君のうりていふはさう
うの心あく

後

花鳥りていふはさう
むをへ

ゆめ

紐

うりの心あく
花の心あく

花

後

花の心あく
うりの心あく
うりの心あく
うりの心あく
うりの心あく
うりの心あく
うりの心あく
うりの心あく

紐

うりの心あく
花の心あく

紐

うりの心あく
中巻此詞

箋

いりたりの物と分別を記す
物秘たる札とありさむとて

大君におらせし物と札と
ハ申すれ我身むしりのよ
みたりと也

私色ハ八文の始末しりある
又おりの物とありさむと
うしりさけよおはし
と也

まうひりり札ありて

私あつことありつと中
君ひりりやれと札と
その物とありと
いとやさんよの物と
先中と蓋の指と

又あ秘いりり物とありて
御身とありと又ありと
とありと也

乃よりそくしつゝいふべし。

^秘 萱の根一まき

言の忠ひて

^秘 取八高く 昇義

愚よそはみしつゝいふりけりあり

一

^秘 尾胤腹うまかしし也 花

けしひそくおこせしつゝ

そしりきけりありのぬちまき

はまのし

^秘 昇義川号曰

うらりみそいお妙しつゝ

^秘 萱の初

ふりしつゝいふべし

^秘 中志のりうりおくいはしつゝ

しひおろくおすし

多の秘んとおすしあし

^秘 中志の初

いと萱花のあはれ

いづやうしつら西のしと

中君の親八文のしつと

まはつらふらふと

くらくらけと

口唇くらくらくわ

中君の口くわくわ

と萱の花志の切らふと

いとくわくわと

いと萱花のあはれ

常流よりあはれ

常流固成り

ねはまを流介の流園

つらふその時と

こけら

母ふらんれらと

思ひ

おの君の母の流舟の

かありたりしうらや

^家 浮舟と中巻の初のとら

ゆりうらや

仏よありんかいとこころをいふ事

^花 蕙の山里此年きよやとのあま

^伊 山里此年きよとこころ初よあま

乃まあて 美

^美 ちよは浮舟の事末のあ

うんあまこ武ハ人うこあ

一ろ佛 本に法を修り

うらやとこころあまを名のり

よありあまこころあま代川

うらやとこころ

あまこころ

それやとこころあまこころ

あまこころあまの初

うらやとこころ

^母 蕙の心と中巻の初をいふ

のうまんと先とは折

まよく

あなまの事とふあくさ
折る物

中君の公意れあひこの事く

けきよははくくくくくくく

わん

取證

取證はあつらに志く

建ハえとぬと意め我んれら

と中君の志うまうと

うらぬめ入わんれ

いぬひとせひて入

あ

中君の志く中君れ内入

あ

うけさしらい

意のうらまを

かくのこころそい

^美 薫の秋といふ事とさる

とりこらてきんーこらぬあ

秘 河練

花練細練ー ^秘 恋らるるまの薫のこころ練さ

鼻 心るり

薫の練ー結りぬ秘る常乳

さぬ

^美 好ふよ練ーこらぬ結白

くのおのまりーきと

にりりしりりひはかんと

^美 浮舟と 薫の心

ものししはみうん

^美 実よよくにりり 浮舟とらん

さぬ

かろいあんと

^美 とりり腹をよのりよらん

とらりー

人のがいあは河舟の

^秘わらふよはかあらぬ旅ありて

かた

舟の事よは

^秘浮舟の事よは心はそふくは

中君よふ心のうねをこめて

いそぐくはくちり

^秘大君の事

はらりしくらりに

障子あはれ

いそぐくはくちり

^秘舟の事

きくぬき事紙より

松直よ對面中さぬの言礼が

事へされはうよりてみ

くくまをうとこらり

かた

いつにちあは路りんと

秘 薫乃詞

人のうらみあはうく地獄ぞす

りり

秘 在婚君此事と云ひ忘れ給

いふ

秘 弁之親父大君自文此書と

うととあけさ給は此書と

一と也人乃うとあてこく

ゆく物とると一給は此書

うとこの薫乃一はあはうの給

いふらとやう此書とあはうの給

一とととと

秘 婚君中君の事と物と給

ひ一此乃事と

いけと侍うぬ中あは枯の風と

あみて

秘 枯うくらあはあは此風あは

あは一じりり人の事と

きにかゝるあけを治りしと云り
よ世中の由りき後

大志^後此を以てけりし事
と云りしと云りし事
六君の事出来て今又中志
の心くるし入る由りしと
弁厄中出る

私中志此と六君中人物
と云りしと云りしと

中志此今乃物ありいと弁
厄乃る今乃あり
さゆくも好ん

是の大志と中志と此事
しけりし細し

し、あふ事しり好ん
志^秘の初と我乃中志らり
き事しりれり入る好ん

たり

る運はか紙々事ある紙

申張の事もしこのみる紙

うりかろし

あらさうくおひし志のし

大志の命みしうて今ある紙

うりかろしとん紙りそ失と紙

し事いひしゆしる運の意紙

うりかろしやまらりのやうに紙

さしと

此志ろれ紙ありさぬ

白文の事

申張との事

白文よ六君の紙のす紙事

りやれ紙事のちうそく事

さ事うと

されしうりさけ

私六君おろすし中張の

お祈りしたる事いふ

つひてまじりし事いふ

^秘 殊勝の祠へお参りし

せしや

かろしうあらぬ

^秘 ^齊 あのみおれ三々の法事

大君の一廻と身三々の法事

用く 美才三回

松一周忌

いふは事のやまらぬ

^美 ひなとみれいふの事

かろしうのこころに

阿闍梨の寺のこころに

あついで

堂より

あついでとて事いふ

寺を建てた切徳とあついで

のゆく

じりて人乃中人あふ所寸白あり

^秘ハ文之 董の白之 義

比屋舟人何処居憶明年湯
宅初置吾併平人幾家地仙
去双し作梵宮漸恐人家盡
為寺 西朱園判仙寺寢多之 白氏文集

そ此四心さうもくく此さよ
^義ハ宮と仙道より入るる路あり
るれいし

と浦り路ん人成

^秘お文し婚志きくら此まし満す
ゆよこしと寺ありに平今人さ
とさひわつひ路ひ結く先
とと文 義

吾中つ文のわあり

^秘中書く 義

か此宮の所領と

^義しるは白文此は領知と

る〜と也

う〜寺よあさん

い古文の池れ〜のぬ〜
と也

川つ〜ち〜きせ〜い〜あ〜

^養 狭か〜せ〜れ〜

相志んあ〜い〜あひて

^秘 いあ〜寺〜あ〜て別

あ〜ら〜と也 昇 箋

^秘

河海よみ〜あ〜い〜れ〜あ

好智とすと〜は通よあ〜

多〜と也

^養

親言摺か玉因位の本〜あ〜

あ〜す〜心〜と〜あ〜

あ〜の〜み〜て〜ら

い〜の〜あ〜と〜あ〜

寺よあ〜あ〜あ〜と〜

あ〜あ〜あ〜あ〜あ〜

多^秘く〜事あり

退^秘く〜事あり

こよ〜世の

曆博士 推古天皇十二年甲子

正月戊午始用曆日

弘乃西と〜の事

寺城多〜極と悉弘説を〜

法令多〜

と〜此のい法と先て

意乃定め〜

こ乃〜いり〜みめと

意のい〜寝有法こか〜

進ハ〜 并

志ん後と〜して〜

あり

并〜意乃〜

京此文に〜物あり

中〜事あり

養
ワラサ物阿のん正座の人にて
ほろつせしと

秘
お指大納言の悉此正ありき處
柏木へ 養

秘
あ〜〜くおり〜ま〜ん
蕙の誕生の事へ 昇

秘
か乃正世よじつま〜く
と蕙のあ〜り〜るれ侍り
柏木によ〜く〜やほ〜る〜

ま〜り〜陰徳陽報如〜

と〜
さ〜く〜事とみ〜ん〜

養
柏木八又大悉るの事へ

秘
高〜り〜と〜ま〜く〜
中君へ 養

こひめ悉の〜り〜と
大悉此事へ

こめ〜〜く〜事〜あ〜

花

こめりし心いん人のほじりては
やうらけいふとくおあ
まの海一さるさあ

兼此花鳥音おせ

巨也 意の心

文此由し

申志の事

心ゆきしおん人のまはあ

うらけいふとくおあ

あふ志しひまつ心あせ

るり 昇 義

ふれいし心あ

兼此花鳥音おせ

いんしそ解みぬるさやうに

志けりし兄弟の心あ

せし心あ

かろし心あ

中君此のりりかろし

事く浮舟の事く

京よりこの比結らんよ

^秘 弁り詞

^養 浮舟母の事く

弁の志くぬ

中将の志くぬ

浮舟の母く常徳分り事

八宮乃少方のめいとも

さめやあんとおひする事

^秘 八宮の事く

あし

^養 女子の浮舟く

をさるり事

事く

^養 う事く

おひする事

事く

事く

箋

八文の献却しつゝあり
さうひみくまれのけ中おそ
の退出しつゝあり

みられらよのこりあり

との常澤分

の給りせうれちたれ

箋

八文一戸とては件客あり

つらと

さそ又むらにるりて

秘

初ハ陸奥守とありしと常

陸はるりてくわわん箋

かの文よつとあり

中末の由ありて

さうらりり

箋

浮船のてんハ文の由あり

給り四年後り事あり

くりくさうありあり

秘

煮の包

みとちと思ふ心してさぬ

^秘能くさへて蕙のゆふへりく

じうこれ世をひよ

大君は船りりんと也

うすもの路いさりたれし

八文の酒女乃頼よの酒のさ

つらき也

母よこの水のうさこれ酒のい也

^秘系書とりきり浮舟母中お君の

舟のういこめいこ 箋

舟しごちあきわさうし

^秘浮船乃母 中將君の舟りりりこ

めい也

そのういりわうく

舟の柏木こりふ中おの八宮

くや

大捕りりりり

^秘浮船の方此女席へ 昇 箋

か乃所んりあさる

八文の由夢く

よくとくせてりてまられ家

意よとくれいり

本くくれよるうんせ

氣もくひり

とみりもえりて始る

懐旧乃とひいさるれ氣もく

久されつうりせ

こくにましすうりひこりせ

りひり

木蛸 つくれもくひれ

木蛸ハ本よつうり家虫乃若く

葛此歌く一葉又云本あよとり

つうり虫乃りの歌く

蛸 竹法切身よ虫く 木蛸 玉篇

葛此歌也く

葛乃歌くちと葉のらひえり

引さるるにさるるをさるる
文とあやしくそ

白多ふく中志の成る人あへ
^意 厚くうきまこといおすの本乃りしは
多ひ物といふたさひ

昔のなめあまをすのさひ
うへーとせあへて意一
とよりあうくさるる東坡
吾生如寄耳とさるるい

はくささあさゆと
^美 うと物とよ一物とさあ
あうり常伯乃ら成さる
事

私にさるる本のさの字のやう
てありさしえまの字乃ら
一—あひての本れ字
^{也并元} あまさるるゆくら本乃甲成や
さうとさけるかもの物

秘
あれからけと何となく
一巻目とありけりけり減り
阿さうす昔とさうさう
アとありれり
秘
秘の字々繪く

いそりれあさめ
薫の匂く

文よみからくまのきさうい
宮ありけり秘ちり

秘
あまの申書く
秘
折ありけり白文と
はり

みろこの宮よりとて
秘
三巻文より二巻迄く

秘
二巻宮紙よりありと
よあさん中より二巻迄の

南あれく
まのじつり

けさうしつらむら事なまやあ
えしと句文のあやふか解られ
の中悉のくうくえすく

日
あうた事
又の初

い
うねの物音よ
うりのく家この物音なれすの

あ
ひつさきや世中ううさ
川音日いれ字れり

あ
うりくくさく晴う

あ
うりのく家此奇う心
字活の辨

あ
ゆりし結してこし
彼中の中君あ知ううさ

あ
なる思いく
よくとつ建れく

あ
句の初

何事業もろくろくをたくり
と白ゆき

すら女いけおきやありつらん

菊女子業花業

あれくらにくのまめはらう
そら業てうらえ業て

やうお事業あひよ業ら業と句業の

か業なり業成業知業て業ぬ業こ業の

流業ら業中業悉業の業ら業え業ん業す業ら

さ業波業た業り

也業る業花業人業ら業や業と業を

白業れ業そ業の業ら業ま業え業 白業え業ハ

み業ま業ま業ら業い業ま業え業

山業さ業し業の業西業あり業さ業の

也業る業乃業詞業

中業悉業の業又業此業詞業

字業法業の業事業々業

さ業ら業あ業て業ら業う業と業く業と業

^秘 堂よあしてふらりく——ゆせ

^秘 あしはらよ又いふかの中

あのかげりしりんよりめしこ

しきうしめの初め也何時に入つと

の心あり門をうけしん嚴乃

中にすまはるのうけり此

ゆきしこさうらん

門并同業しうり嚴乃中より

つゆんよりい字法をますまうか

しきう

義

とらうあしんかんと

^秘 とらうあしんかんと

しきう

お花の物よりこしに

^秘 こしきよはあされを尾張のす

くましりらさるし

花林の母れき乃杖うむらん

種より出するもの神こさるん

まゝに平よりのてきし

^松小紙のさむらうまゝに綴り此点

とり

^葉海^清はよ末へ又も終へ

ふよ出ぬ物さし志のすま

まの^齊袂の落志をくして

支脱あり志の落さるるそぬ

りの也と又も思ふ落さ

出^一さよのつらふおぬと

一カ葉の目

中悉れ下し物さし

えん^一多し奇くつらよ

事らうり

^松葉乃折くやうれふら

あまの志さしあふ心のま

つまといふ乃折し終て志のす

さ一程新別ありと云れ

阿り但りよ出さうと云れ

すささりよ出らしよりり

とらりまーあつり 昇

あよくれくあ裁とわうその
くく去君へ白れりてんえ
うひろふとつり

目り身ひつひのとき

大々此我身むとつのはんま
ちつてり世紙も振つるれ

秘計昇日昇日義日

らうあくすーくうあま

白りあろへ

かゝるしーとてんてえんひんあ

しー免と

秘 意あ事へ 義

意此く我あよんのうあんと

うさろーくうろりーく白れ

そん中へ

菊のまこよくとらひんたそ

昇 庭花のさゆり時よあま

秘

菊此所りりり成りりりり
りりりに文のまられりりりり
尾花の時ふりりりりり

秘

わすしけりりりりりりりり
白文い菊うりりりりりりり
あふりりりりりりりりりり
あふりりりりりりりりりり
けりりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり

秘

いりりりりりりりりりりり
菊此りりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりりり

私山義りりり

おの中りりりりりりりりり

不是花中偏愛菊此花開を
文元花 元稹朗詠

秘

川詩曰箋曰
私是ハ菊りりりりりりりり

のまがり唐の元種つゆく

ちあうしれみこの花ゆきふり夕そ
うしつあしとく人乃のまがりて既

芭此子成し〜りる

¹⁵西宮左府庭前靈物降居樹

上託常遊小兒詠此詩教作

者く本意尽字兼請琵琶

授抄平曲小兒醒〜庶巫武

〜灵也授上元石上流泉曲

又天人法巴と〜〜ふ事い

寝そんもの物終〜あり〜

新さめ此中ま〜と云り

^寄西宮左府〜宮あり〜新〜

子あれいみこと云り如〜

^日天人乃けりて新そんの物沈よ

あり庶巫武〜是〜

^女西宮左府ま〜親ま〜

〜皇子にとりてかく云れん末

代々の奇蹟をいふた書かれん
曲しるは事と也等

是の菊りりうけりりあふて
比巴の付てり事之此花をて
りりり西文をた討言明菊紙
をりりりあひあふん時節よ
新りりりり人乃比巴をん
るりりりりりり孫是物終
よあふり出るる志りりりり

平元孫是 隆松の物語と四
指の付りりあてり 紫式了り孫
氏物語紙は花乃心よあてり
書也は物終りりり皆會りり
りりりり

所、と所りりりりりりりり
此巴く結の巻若りりりり
あふにりりりりりりりり
頼成りりりりりりりりりり

秘 琵琶也

くらひしそら

中君の心 箏

心 くらあきくもあきり

秘 中君の視へ 面白視へ高時

うんあきくもあきり

あきくもあきり

とあきくもあきり

たより箏

しんしんしん

秘 中君の筆とそらのすて

昔しんしんしん

秘 中君の視まのよ人 くらあきり

あきり

くらあきり

白乃初

ねんあきり

あきり

こりはみふらう

母 六君らう

かこるうたうらうわい

母 初心ちうげん

うれ中納言し

母 女らうたう

ちうらうたう

心よせの葉中納言

ふらうたう

母 葉の葉

母 葉の葉

く

母 此中納言

ちうらう

かろ君らう

母

母 葉の葉

ちうらう

乃てくるなり

并 蓋ふのほみぬりし白乃

うみまふし

ゆふひよりまれの

比巴の上より 黄鐘調のこき

くそとあり 并

柱のまらり起ゆひてさしり

うれの則 盤渉調よ志るる

まて 盤渉の柱さしりて

まのゆひより比巴とて黄鐘

より志るるなり

伴 概方より

伴 響乃字 奏乃リ 支乃支

乃 名支 左尔之保 加 比尔

乃 利 曹也 津 未 年 乃

加 比也 比 呂 波 年 也 多

未 也 比 呂 波 年 也

伴 響 海

花
徑路海の津の舟之盤涉洞
も津之平洞よ如くくく
まや郢曲の衆りくくく
一
白文催馬樂成るひら
くく
筆の音成かたてくくく
くくく清き清きくく
くくくありくく

くくくまがくくくま
くくくくくくく
何因梨の也音くくく
寝衣とゆゆんせハ孫そくく
くくく寺くくくく
くくくのくくくくく
くくくくくくく
くくく因縁物くくく
くく

あを村一とていふことなり

或傳記云觀音誓至むし人

乃子一とていふことなり

繼母此とていふことなり

そのおやけいひとていふことなり

けては井に伝道よ入給を

あはれとていふことなり

見河親善誓玉の因位はわ

り伝道よ入奉とていふことなり

念慎とていふことなり

あはれとていふことなり

寝返りて又誓へ白此對面

一とていふことなり

いふことなり

久しとていふことなり

夕誓の初は此院とていふことなり

ちり六条院の西後久しとていふことなり

とていふことなり

^昇は流ハ二条流也

屋^受ノ川つ連^受ニさあ^受る

連^受軒^受ノ

ち^受ノ^受くもあ^受る^受る^受る^受

つ^受ら^受る^受也

申^受吾^受る^受れ^受人^受の^受心^受く^受る^受

つ^受ら^受流^受ハ^受屈^受の^受極^受り^受く^受痛^受の^受字

の^受心^受

こ^受よ^受う^受に^受お^受く^受る^受也^受お^受く^受

つ^受れ^受

夕^受吾^受と^受み^受て^受人^受の^受心^受く^受る^受

所^受こ^受も^受れ^受よ^受る^受也^受つ^受ら^受る^受

也^受

夕^受吾^受の^受子^受是^受れ^受つ^受ら^受る^受

也^受

所^受び^受人^受よ^受も^受つ^受る^受

白^受文^受の^受所^受連^受り^受る^受

こ^受つ^受ら^受る^受也^受

湯よりいそいでかへてはるひあり

より

^女中書へ中書おのこ

より乳やりおのこはるひあり

^美六君いそいの事へ

杉心やいそいでいそいおのこ

宇治へ遠道の事へ

いそいでいそいでいそいで

^女二年は是れいそいでいそいで

正月十日よりいそいでいそいで

よるやいそいで

^男董おのこいそいで正月へ 早蕨乃

^女巻のいそいでいそいで

董おのこいそいで 早蕨乃いそいで

いそいでいそいでいそいでいそいで

中書誕生ちつりいそいで

去年いそいでいそいでいそいで

^男去年いそいでいそいでいそいで

二月はあきらけり

文未行部一志くぬ半りせ

^笑白の産みよの事紙志り

始よりぬ

又くしめそ

始より始り終法あり

いなりなり多き

まきいなりなり

^笑明石中より中書紙に

始より多き

かして三とせよあはれ

^秘かきいりたりなり

いりぬ

^并中書り文りかひいり

よりなりぬ

ひとをたぬえり

^笑白文りりりりりり

公界りりりりりり

とあり

所家の女二文の正意は

いぢあゝ薫乃事とりとて

くくろり

^秘 薫乃事とりとて正勝と

わまの正家より太の事とい

そまきり

^昇 りて正家ありと正母

薫乃勝よりてのひらり

正一海見おんりそ

めてくけよんをれ

^義 母女御おんせぬよ

正家よりとて正勝

正家よりとて正勝

正家よりとて正勝

あゝと見たりと

正くも

作物所

秘小言
朝廷事
何事し
一事し
ありし
西此守に
ていし
口ら
い

秘 物のくくりたるしする前之 養 昇

す

秘 固まるは終つけし

養 交領くやう此臨時乃課役

固守に終る事

やそその預年うそあまの

屋

養のまのうそあまの

秘 和正蒙着の比より養

あ

男うそ心つひ

養 養のうそ

秘 進い乃事

秘 養乃

こ此

中

る

秘 除目の後執筆中

さき次より任官ある事うらうと
代之くくもえんふりけりや
昇 箋

直物

懸石或京官除目以後執筆直物
物ヲ申付らうり或除目以後兩三日
シ経てもある也

先交除目各差ノ事ハ成る
寸石ハ直物ト云

持大納言ト云らうりまのり
右大將
け 後付

意の任官為官の事

右のあらうとのたをかん
り志のりふふるり

竹川昇進のしるし存大

竹川昇進のしるし

不承はたふし

紅梅如し竹川春の昇
をりみりけり物所保民必

存しみる

けたふしお梅あし
存しみる

右大納言人たるは辞をいひ
時の右大納言たるは持たるは
一々の意は太納言にて
右大將と兼すなり

よるひは一なり

意太納言たるは交之内裏よ
つと初てあり中よりありき

おれにありませす

中素よりくわたり

右白文二条院はありすの則

意のよるひは兼なり

そるるはひいてむんる

み

みよりまかりとのま

礼

取のさばつさしむるは

る

おのそむりれ

中さうしえ次の初より急ん
ふのみこまらうとありさるは
休まのあつさり

^并大納めつうささくに祿多ふ
白うあつとふひさひさう

^花大管よりあつは河海流石と
ちのうら大響よりいん文は
恒下より云卿の大将より
上の人のつうささくに
空義

大将を建い中少将監以下
よりかき招きすふ事より
親王云卿恒下此衆と云
伴あり

^花西宮抄大将初任事陰日畢
大臣以下著議一取座大将暫
留於射場殿令奏慶祥舞
此間可奏
舞事 渡南階あ退出し間
近衛も候庭際息然祭物色

撤箸放歌于時寧云卿及次
將以下出徒敷政門向里亭女
將以上恒下云卿各著座上卿以
著座外次將在明先近求以上六位
官人於庭前歌舞訖著庭
中座次云卿及中女將未座
立札相次立札合一床於庭中
給六位已下肴物盃酌先等
之後被物縮也各有差但新
任大將若在里亭者引可到
其家欲賭弓勝方卿食准是
可知此日以親王為項下蓋故
實身勅物云大將上膳不來
有親王大將著中將上今案
大將初任時之方此少為
以下之法して大卿食乃事と
行少て禄と多少之句若る此
みこと卿食下之語——ヤル

よるやみまふ人よ事よ後て
そがしむあふふとて

右大臣のしるまのつちうにそえ

夕香此大饗官の例めて蓋大

めめつる此祿と大条沈と

志のひし也 義

志ん乃みきこころかんあらめふ

みやうふおとす

垣下 大饗官

垣下乃志とふいあふ人の語

伴すふと垣下とふはしを

かいしとふ事と云郷の大

物より上首此ふいひじふ

さうく親まのじふを付大お

乃つきふあふ事ありふま

し垣下の志は語しゆさう

あより河海と親まの志の例

志んあふと志のうけあや

まはりの事へ垣下とていふ
しきもよとらふてす 箋

こた文もやういひて

并 先ハ辞退し給ふれと

いふりあひし 箋

まこと事とてぬよつそんくう給
わらぬ大とのあつていふとあは

箋 申志のむしれくそゆりまを

け事ハ六条院まであはれり

六君りのとるり給うて二条院

へ入り給わらぬ夕暮りうら

先さゆしとやと

おしりくもあはぬ所かとれる紙

申志しハ文の所女るれハ六条よ

このとおしり給ふ事とていふと

おろしおろしてとてあはら

夕暮りも持風加ふに女志とてか

して申志をよめ物の新きまを

やうに事しるゝてめふ

おとこ少しじりれはつら

中志男よとの着ふとうみる

大おあしよりこひよとて

薰葉太細き大おの昇をよとて

男生活つくと悦み

よんれりまうら

白文は薰の縁とわらわ

此所よりいしうりて

誕生の悦

ゆりあうる産穢る

くこりありませ

産穢葉のりく白文

みうの連いのゆえん

白文葉はまうけ

五日れよん大おあし

めてせた

田基 出錢

秘

奉乃け物之 等

くはる此の時奉乃け物之をせわすに
そのけ物之は後とす事

李部王記天曆四年七月七日是夕女御産
養産婦饌衝重十六合破子食七荷七合八具
基手錢二百贈物兒衣襪各五重納交依本宮
二合有白絹使大藏丞坂原守忠傳言云物虫鄙陋
今宮取贈盖可有意報之恩回備至恐喜兼
深况兼宮恩命折恐元極即纏頭白細長一

重袴一具守忠令遁出門追傳報賜禄
こりり此中へ乃けいさう三十ちころい
川へさうさういさうさうさうさうさう

天曆四年同五月五日此日自中宮給産餉
息所前衝重七枚面打敷專用蟬翼有銀
笥箸上例濱木酒壺如如例有男女房
御食各用朱臺盤荒純食十具皇子御衣
十五具唐綾襪五具平絹襪五具納深折櫛四合置中
取二脚九条右蒸相記

同記云當牙七夜姬君政取設餐饌息取
御前衝重北前縑面抄敷有銀筥同四
枚箸上例瀆又有酒壺具又親王公御料
北前每前繪抄敷四枚碁手五十貫純食
五具 冷泉御誕生記也

四條抄曰右衛門符奉碁手錢威札立御取召
使農前置高
坏官人取立玉御傍

新依制令停止

依例或有困甚之與此同或府指勸進

等

此事天曆四年冷泉法沙誕生此
例とつり又所子らみあふ人を
産婦とつり則所こりらと
つ子是く

又此所中人あこせんつり此行
さあつりさともりてあふくさ
らあつり

秘 粉熟

校本云今ウシサウノ揚十也云河海一平アリ

點心節會乃時とる 餛

花 飢しつりうどんと云物し
粉熟い五穀とみえうりこころ
て粉うりて餅よまあして出
て耳葛紙つけてこころあわせ
くかそ紙竹の筒とてそ
中よかきこころしてあ
とさしてはさおして甚安ぬ六の
細交のあしこころあうけが物
袴 内袴の

水乃おしりまうくの西さ
くれあかみささいりあまそれ
ふうらつこあかきしきり

私せんすくの事 苑鳥西流

うり

七日れあひささのえあはしあや
しるひ

明石の中宮へ

宮のたまとしめ

秘 美

中まをすく

流しきり

内あしきり

美

美

内く

主よく白文の初より

内く

大いものより

秘

美

夕音く

白子(お)りてじと

りりく

内く

秘

中君く

弟子能く

美

積りきり

煮のり

中君のり

とく

ま

し

より花をやりつる年急の逢し
て、南は十らと形う 是意乃
性之

そ此月の古日あまりにほそ

二月
日月古余日女二又石叢とあり
てぬか取意乃多うう人あそ
と取乃作はの客候ちりり
そり

きう人乃くくくとまうりらま

女二宮よの稻意しあすうとと
すうくくくく松りーもすはん
あそ

今上此由の候しそ

みこのの西しこよあう人の心し
ともあがれとわくはらり此由代
よるあ人の候しりしことり
りそつせあつるあひすうさや
らうん

花 如

花鳥子^り

淡^淡皇女崇^崇姫通^通忠^忠仁^仁云^云宇

多^多皇女源^源朝^朝臣^臣傾^傾子^子通^通貞^貞

信^信公^公醍^醍醐^醐皇^皇女^女勒^勒子^子内^内親^親王^王配

右^右大臣^{大臣}師^師輔^輔云^云同^同皇^皇女^女雅^雅子^子内

親^親王^王康^康子^子内^内親^親王^王共^共配^配師^師輔^輔云

同^同皇^皇女^女請^請子^子内^内親^親王^王配^配大^大納^納言^言師

氏^氏卿^卿生^生一^一女^女沼^沼子^子内^内親^親王^王配^配大

細^細言^言源^源清^清蔭^蔭卿^卿後^後配^配河^河内^内子

橋^橋推^推風^風村^村上^上皇^皇女^女保^保子^子内^内親^親王

配^配貞^貞信^信公^公威^威子^子内^内親^親王^王配^配右^右大

臣^臣顯^顯光^光云^云 保子内親王配入道大政大臣

兼家云云 貞信云非之相國冬良云

押紙ニアリ

今^今業^業是^是古^古乃^乃例^例皆^皆公^公脱^脱徒^徒乃

後^後或^或ハ^ハ崩^崩御^御乃^乃後^後多^多ク^ク人^人の^の

よ^よ未^未り^り乃^乃ふ^ふま^まり^りて^て在^在位^位の^の天^天子

乃^乃御^御女^女后^后下^下の^の配^配ナ^ナリ^リ事^事ハ^ハま^まれ

たうては漢朝の例はう
妙くさうか漢朝の例
まうありきれとい高すとい
ふさく

^美すくするやうきんとい位の時
の例延喜北門師補ふの例と
い蓋ととい

私師補ふの例勅一

右此おとともめつるころ

人の西おわり

^秘夕吾らう

^美夕吾此蓋の事といのまらう

蓋をふといの事とい

みらう

二院より東麓沈力御末とい

せつて

源氏事 ^美

私是ははらり此代は蓋とい

とらふまゝ

かろふとみ成

そららけたりやうな夕

香かゝるおんこ

秘 女とみ成

恙の母と女とみ成

我のまゝてんもゆりあつ成

秘 是の夕香かゝるおんこ

のまゝてんもゆりあつ成

とらふまゝ

秘 落葉とみ成

大花御とらふまゝ

秘 今と女とみ成

とみ成

そのおとみ成

とみ成

秘 大花御とらふまゝ

とらふまゝ

私是ハ大やを事ト云ハカシメ
ニヨリテ如クシテモハシクハ
一人のむじり此ニシテハ
ウリハ新ハ古クハシテハ
ウリハ事ト云ル如ク

心乃^美ウラハハ行ハレハ
大君乃事^秘シ
蓋メハシク

まろそとせとてゆつんと

句文^美の所ハ何カシテハ

我^美ハ人ト云ハシクハ

中^美ニ事ト云ハシクハ

又^美ウリハ事ト云ハシクハ

中^秘ニ事ト云ハシクハ

ハシク

之^美四日ニ事ト云ハシクハ

句^美此ニ事ト云ハシクハ

ハシクハ

六巻此所へ

おしとらりたりおとひたり

うたもろりり

夕音内より退却し

二条院へおん

あしとらり

白の初之夕音内へ

りくのみ

ひらりり

兼 兼此私人の進

兼 兼の系入の

里亭へ

まき宮へ

兼 兼ら

おりし

孫へ

兼 兼之れ

ゆりん

大抵あまの文のし事なり

^義女らあらしり故米菴院のし造

勅めしらしと別して主上は

は慈切らりし也

そりきさ波らるる

^義女を交より主上(奏)はあり

いよしくさるしり今也

くせんしれは公まに

主上女ら交りし中(如)し

公れうらよらるるし

^秘意の心なり

^義女ら交りし事しはのし事

しめぬあり

宮れより書のし事あり

^何五十日或百日齋餅事

天曆四年八月五日齋官降

詔(後)當百日依世依し例

倍御餅米小御臺六臺御

已助乾荷葉四行已上銀器
二基唐菓子八種二基餅八
枚一基木四種以上成平盤
九条記

子誕牛の後立十日辰いづと云
百日子りかこふこの日後式
ありて餅とらふく
しきおとらふとらふく事

しき

一 美 細工とすくくはさく

ふれるしやわらんすう
おし

美 蒸のらさむり昇進も
あり又んしの比年加し

美 中君の記
い

美 蒸の比し
るるぬくをやくて對面

るゑ

ありしうらみはなむらさきに
涙くみて

^美萱の折て大君乃事なむらさ
まぬさむらり

心あも何れもまららむ
^秘萱の初こ

女さあふあうかふ事な
あつらふこと

^美ことれおのむらり

いあさまらる事なれ
^秘中君初詞

んよこらむのつらむらり
ゆあありていねつらむらり
忘れえくむらりらんむらり
さよ

^美大君の事なむらさきに
あつらふむらり中君乃

るるあは

おんせまうら

秘 大君のうら

美 中君此うら

わ、ありさ後りやうらうらや
か

中君の如く大君此あは

美の事とさうやうらうら

事とさうらんとさうらやみ

かうらと中君と大君此あ

さうらとさうらとさうら

初うら

うらうらとさうらとさうら

秘 中君の我身うらうらと

て後悔の心をさうらと

み作りと

美 大君の意うらうらと

ん成事たりうらと我身うら

中君のあつな

さうしん事ひらひらうきさう
みみうきよりおの

美美の中君(白紙)くれ事
志さられぬ事なれは是一
の根さのり(一)一を介の
美の心(一)うら(一)の中
君の心

めみ(一)ては(一)さ(一)せ(一)う

如事(一)の(一)あ(一)き(一)あ(一)ん(一)や(一)

若若る(一)の(一)と(一)れ(一)は(一)一(一)は(一)
くひ(一)ん(一)事(一)う(一)は(一)く(一) 舞

私小(一)く(一)つ(一)ら(一)ハ(一)シ(一)ク(一)心(一)カ(一)場

事(一)コ(一)ソ(一)ム(一)ツ(一)ヤ(一)シ(一)ケ(一)レ(一)是(一)ハ(一)ニ(一)ク

ケ(一)ニ(一)指(一)ニ(一)ル(一)一(一)キ(一)事(一)ニ(一)モ(一)ア(一)ラ

サ(一)レ(一)バ(一)ニ(一)ク(一)カ(一)ラ(一)ズ(一)モ(一)ニ(一)ナ(一)シ(一)テ(一)見

甘奉(一)リ(一)始(一)也

ふ(一)や(一)ふ(一)め(一)ら(一)り(一)

昇

徳とすしすりよるあはれ何とも
おとく物いよきくか

美

ま物あそみまうりく
薫の子りりりきこくさて
ふりれ事ららるる世中に
とらるる心りいてさあつと薫
のらりるる是年と

世

此らるるたるあれきく
道心おらうーかーと也

(1)

秘

さしししししきく
ふらひらるる大吾く

美

大吾の世りりりりてわ
のみれとあはれ娘ーりり
しし也

おとく物いよきくか

六君れは腹りりりりりり

しし也

美

女二又みりりりりりり

所子此つてさよくしるは意れ
さひりりさきあし
秘り義あやなり

あまりす人乳交其の所なるれ
^箋ふさしはあやす其の思ふす人
こやしとたはれれとさ子の
許く又けはれし一は其の思ふ
許しふれり

かくめくく秘りきそまひ

大い事

^花是の物治く人の其の思

しる

^翠めくくはめくく箋秘

^秘悉皆弟子此初く所くは治

流しはくはあしとさ

めくく

^箋中ひるすしるは其の事

あしはくはあし

まゝに〜^多 元明この由心と云て

意此後辨と今上此由心

不ありて〜と西し〜

多あ〜ん〜

か〜ん〜

〜と〜

か〜^多 元明この由心と云て

意此後辨と今上此由心

不ありて〜と西し〜

まゝに〜^多 元明この由心と云て

意此後辨と今上此由心

不ありて〜と西し〜

多あ〜ん〜

か〜ん〜

〜と〜

〜と〜

〜と〜

〜と〜

おのころのまはるるにふりあはるるよ

^はおのころのまはるるにふりあはるるよ

ありとやうにさうりあはるる

夏よりあはるるにふりあはるるよ

よあはるる

^お夏よりあはるるにふりあはるるよ

^ままふささりあはるるにふりあはるるよ

王相と云ふ正月寅より辰まで

と云ふ

卯月ついでに比せらるるよ

^は卯月ついでに比せらるるよ

^花四月の節はよひあはるるよ

あはるるにふりあはるるよ

^ま女つとまふささりあはるるよ

四月の節卯月の節はよひあはるるよ

と云ふ

あはるるにふりあはるるよ

らせ給へるるにふりあはるるよ

せらふし

花鳥西宮とひまわり

女二又三葉の里より 二葉三葉

所あノ日於花音念 並つて

故の花乃宮あり 河海も

延表二子の例とのす 花鳥

の天曆之年此例あり 並

の例とひ合てけ 物流り

りまう 天曆之子 琴 此流り

奏す 延表 所筆 也ろ 並け

物流り

飛香藤花宴事

延表二年二月十日 御記日

此日た大臣於花鳥會 並花下

有献物事 左大臣 執献物

祢菅根 所贄 可為 作 所 是所

宣旨 別當也 而後 列坐 並

花下 盃酒 教巡 後 左大臣 殊

仰右大臣將令獻題日飛香舍
多記和歌則凡大臣置御硯
連奉平跡連燈獻描笛和
琴其掛笛箱是兼和色物
耳酒盃日奉群片酌酌管
絃竒舞亂召教固親王備前
少忠房令吹笛換給祿群
臣有焉

西宮記曰天曆三年四月十二日

苑

於苑香舍有藤花宴以殿上

御倚子立南廂代有南廂東

一二三回卷簾玄母屋前立

四尺屏風二帖敷信乃廣苑

中敷毯代立以倚子南簀子

敷同延日簀子中間以東敷

置公卿座當庭中戶南立

五尺障子其西在酒具赤

漆火炉一口有黑漆臺同机二

前其上在滿心瓶令作金銅
抄伴鳥入御酒銀御銚子一
口加土器臺盤炭取當公卿
南前庭敷紫端置四枚其
南敷二枚殿上人座御掃
部察令敷軒廊東小庭
置二行西面北上樂所座未
刻御出召右大臣次諸卿
參上次侍臣著座

四位少六位五
位南

供御膳具註維時朝日寧
五位六位自南庭西昇置物
御机二基立御座西據木作
在木南地倚敷物卧但古御
折敷四枚立御机上淺香
折敷沉香以金圍一括葉色
唐羅花文綾交在心葉藤
花雨組木件但折敷一各
四加才象臺表紫檀裏蘇芳

在銀筋供膳

折敷二枚
以椽木作

以肴四種生物丁物

窪坏以銀作土器 以黄土塗

供之陪膳退下給臣下衝重

供御酒 銀蓋維時朝下
伊尹取銚子 給臣

下 義方朝下 二献 餽 餽 臣下

大臣奏因召系所別當中細

言源朝旨令召系人別當仰

藏人召系系所參入奏調子

有奇事

立文臺ヲ
南庭

立置物清

机置石硯紙給臣下献題 維時

大臣奏准延長例地下人一

两献奇召庭燎 月光
明也 献奇

伊尹取文臺右告衛统清正

講之尤少將朝成義人致雅

信朝旨夷姓地下献奇者源

绪為原魚家茨木有時々方

等之々海奇大臣取御製

召公卿侍臣堪奇者奏絲弄
 大臣納言渡西大臣取御杖
 源朝臣取正琴譜進御前
 奏云延喜御時正和令譜云源
 朝臣亦祿物名授以花人置
 正机琴出袋彈御兼家被
 聽昇殿大臣賜祿納言女世常末
四位白細長大臣給御衣一籠又
 以女裝給之

南此のさうのみすあまそり

しそくそり

天曆三年記よみそり

あまのこたえのはうまうりゆま

阿す

女二文此ゆはりいあ〜ん内

よりたへ

秘 阿すのまの女うはり〜ん
 まよりり此ゆはり

右のおくあせり此大御言

^死天曆二年右大臣師輔公為

ふの上首

^昇夕三つり志とあり中あり

^秘古代志とあり花鳥天曆二年

右大臣為上首とされと乞ひ

たぬく——夕吾此事るる

たとあり

^美夕吾こたトあり

^昇按察の紅梅に似たり但ふ人

祇にて然る事

新按察のふ梅は都の能く

末の初よりとけりあもる

ありあり又夕吾は大臣よ

時中ら時紅梅志大臣とあり

夕吾は及分大臣とあり

ありあり新按察よりありの義

大臣とあり

兼中納言左云清智

^弁 翰の息元

翰思大臣の是元云清智同元
中元 箋

私元云未替トアリ 翰ノ息ハ右
云清智元但云清智ノ元

三文

^秘 白多之 弁 箋

むらじ文

^弁 曰 白多之

私更衣云々云

南乃庭此兼のむらじに云人

此ざり云々

^花 天曆三年南庭 兼花下賜

近臣座 箋

云々云々云々のむらじに云
その人云々云々

^花 天曆三年 行廊 東設樂

所座 箋

相此初うらうらんとつ家
石堂夏あつやめての宴あはれ
後涼夏いそふお遠す人
古井 軒 癖 此むんうと
いふとさうぞうとんとあや
まればか——一尋
宮此所こよりほこよと 第みと
いふとせり人の

昇 女二文く 秘

ね〜おろ〜

夕音 下く

此中人よ〜りつ

箋 うらう物と〜きと〜す

こ六糸院の所とつ〜さゆひ
て入道のみ〜き〜せ路〜
えんのぬこ〜んぬえ〜ふたえさ
りつ〜さ〜ら〜

秘

入道ふの女らふふくきんのか琴
乃藩之

昇

董のふくせふふくと夕音れら
つきまふては例 花鳥とあり
延喜正門勅子内親まの如く
のひり 筆譜と九条の太皇
相りつらりてらうとと世お
の是女安子申ふ 号ふと世
らりはらへて村との夫と一を
まひ 事とらり

の

琴 延譜五卷 雜記百廿卷見
在書目六

美

やうの物は、まの枝よつ
ゆくと大部の物と三卷、枝よ
はちてはらうとふふよと夫とら
也と

花

天曆三年 右大臣捧先皇賜勅
子内親王筆譜三卷 左衛門

督執赤第一管

元貞保親王
管

右号衝督将螺第一面

元貞親王
物有奇音

養若献し今業天曆三年

夏垂女御安子の九条右丞相

所女之延喜御門ノ所女勅子内

親より所せり人ふ等語と

いそまろふ事と御所のゆかり

よ六条院の女と云ふりしりて

まろり流し琴の語に

そせりてに海ホの流抄めと

みまろり事と

朱雀院の所物と云ふりたり

是ハ意より此まろりのを物と

れ朱雀院より女と云ふつらり

て意よりまろり物と云ふ

第ハの管より

花 柏木此處の管の管と

妙 柏木乃管と 管

めてうせあひたれん

今よのこひてかめさせあつらん

大おのほろえのうらふそとにるん

秋のこきり

^笑 夏乃ほろ人の第ほのほ下

て吹しるらん

ほろくふつさるうね

^笑 郢曲よらんあふらん

宮乃ほろこりあんとくまのほ

流 ^笑 のり

^笑 天曆三年沉香折敷四枚紫

檀臺以土器様銀器供石者

粉熟有赤漆火炉銀鉞子

寛治五年万壽元年天盃

用溜瑠璃御盃

くらねじこりらん

^笑 蘇村法寺

あろこねやう

銀様器 或茶器 親行託

為り此法さうつさ

花 百壽寛法の例あり

包い トーのえちり

秘 名を抄云金翅鳥印穀魁神

得之出賣与人或名縛瓊瑤

穀名曰縛含也青而含赤色也

名清譜正しりるい

名出譜ハ鬮正此息

美 天曆例此

夕音此天盃成毎度ソリ給

くり多ふ事と辞一々之

文達ハ西子あれや蒸よりの定

おと志きりてハむん大ら歌ハ

花

夕音此ねと云卿乃上首

みせ毎度盃成くりりま

りしりては名ハ位決とみ

ありて天璽成ちぬよるま
 天璽と毎る上着給りまうぬ
 親王を連の中よふりつじま
 てちぬよつりま
 ちりりかると
 夕暮の雲成ちりりま成ま
 の斜形あつて
 天璽とまふといふま
 天璽とまふといふま
 天璽とまふといふま

ちりりかると

賜天璽例

天曆七年十月廿八日 菊合式
 了卿 親王 重明 賜天璽 寛
 弘四年四月廿七日 宴 宴中務
 卿 具平 親王 賜天璽 以上親例
 永延二年三月廿五日 攝政 六
 十 賀 攝政 内常 給天璽 永祚
 元年二月十六日 朝 親 行幸 御堂

殿給天杯寛弘三年三月四日
行幸御堂殿給天盃

日五年十二月廿日 後一条院
御一百日御堂殿出盃 以上給親

政臣例之

今業此後万寿元年宇治夏嘉
保三年系極殿賜上白皇御盃
寛嘉三年光明津寺抄政永徳元
年室町才行幸鹿苑院大相国

未給之也 為後字以次書之

予一と予一 河海乃流皆今
業一 一向一 志一 女事一 予一
知事一 予一 志一 予一 予一 知一
予一 予一 志一 予一 予一 予一
知也一 孔子の格言一 予一 予一
志一 予一 予一 予一 予一 予一
予一 予一 但永延二年三月廿五
日小右記云 抄政六十此知事

大工片起座献御盃右大臣取
御鉞子主上給御盃於攝政
此同被仰壽言 式者云万歳
千秋
攝政又之普奉之可尋記
攝政下庭中拜舞之
也此例とあるはハナハト
之の秘言よつさうらり奉りて
りやあつらんあつらん
進會 日記紀中七
案ハ

秘 祿唯より就
案 不分明事ハ
不知り
不知し

昇返り
河海流忍る

幸ふみゆり
みよ此はじこめりて
一より日あれハ節一て
所一ハ行りて
天盃成多ふ時ハ正忌とあり

此盃の酒はふつ〜入ての心もこ
それら〜けとさ〜か〜
〜云飲と〜りて後〜
の階〜り〜りてはあ〜ひ
て舞踏〜して座〜り
ほ〜れと定まる能法也
盃乃數濁と〜りて天盃
と懐中〜りて別一盃
〜〜〜

和

并
天盃は酒か〜か〜けと
よせ〜り〜り〜り
〜同云天盃と〜り
す〜り〜り〜り
一勅〜り〜り〜り
〜り〜り〜り
〜り
同云天盃は酒か〜か〜けと
礼〜り

一勅膳の時定礼也

あれはまゝしてはじこめ

¹⁵漢書曰女子公主注曰如淳曰
公羊傳曰天子嫁女於諸侯必
使諸侯同姓者主之故曰之
公主百官表列侯一所食曰
國皇后主帝婦姊妹曰長公主
正三位源朝長御弟姫者源成
天皇之女也天皇造年未得其
人太政大臣正位藤原朝長良
房初衆之時天皇悅其時探詔
倫殊初嫁之

くさりまゝかゝりかゝり
つる

河下座
位次ありき也

あせらり此大御さのいりれ、さうか、
子めもらん

翠 紅梅のま

さへうす

紅梅如し

ありは義て然れ

紅梅乃大

長如し

まううり

私紅梅の義、然たり女、ま
あ、は、あ、い、け、ま、
あ、い、お、梅、の、故、後、仕、の、お、ま、
此、字、掃、う、り、人、あ、れ、い、は、は、
乃、事、す、又、静、の、よ、ま、い、は、は、
あり

翠 紅梅如し

此、ま、乃、は、母、女、御、ま、ま、

又、大、長、乃、家、う、あ、せ、し、時

と云至上の御後をよめる
云後のおもひよむこと

そそいえきやあや

箋 家此えんの事

さすりゆうしを積り

箋 揣摩の心中をとり

あそくうて方ともいそしめ

天曆三年四月十二日記云地

下一支酤齊召庭燎 月光也

酤齊とあり

箋 天曆に作文あり皆詩也

とあり

ゆん多いり

松 弟子能く

あふけよつりこいりきん

詩のこりつりぬ事

あつりつりぬ

つれもつりもよるぬ



中一とふゆこ二乃まらとあ
ふまゑる合す人
此
よの町とふとらふりふ成

宗
よふりふ成
よふり
族姓もとよらぬ事お連
と

大お君此所はしを祈りて

秘
よの所かうをたふとて
あな成はうに意のあり
てまてまらまか事う
一の祠うれやうにけ
こ弟子此あ

意
すうまれかうにあかとも花
よのね枝り神ひけてきり
秘
よのね枝りうま成り
此
此等意のくよのねえは

女二文の事よふりあつたの
は女中と多かりあり
主上乃は為ちよきよのわね
神成りけりあめれ子かき
るりよと下乃の女二文此に
事へ

けりあつたの事よふりあつたの

^秘我ありありと

^笑我り地へ理運り我りのよ

いさなりは評す

今上御製

いさなりは評す

きよとありあつたよき

^は飛香舎 菫壺 延喜以奇

^{新古}うきよとありあつたよき

かけて白つた花の花

^昇主上乃は極へ

^秘御製へ行末百歳如く

まじりあつたよき

夕音ちうく

花の夜もあさあさぬ物うと
あさあさぬ物うと

何紫

あさあさぬ物うと
あさあさぬ物うと

花

あさあさぬ物うと
あさあさぬ物うと

あさあさぬ物うと
あさあさぬ物うと

あさあさぬ物うと
あさあさぬ物うと

秘

あさあさぬ物うと
あさあさぬ物うと

弄

あさあさぬ物うと
あさあさぬ物うと

弄

あさあさぬ物うと
あさあさぬ物うと

梅慕

全

位ふん可成 和以上昇

お梅のいもふり新此より

あやうさふあまは梅家印梅

おろく

右の大成此は七節ころめ

又吾此息 系圖の音下あり

てはこやふりあま今上此女二

文家の家一はひ一時筆

のあえあまさ一りし人七節志と

あま

和系あまの男子此八人あま

そは乃せり母ふれ

あ

あ

和系あまの

阿つあらうちあうせうつ

あ

還歸也

上つらめみこあうらう

親王公の御祿あり

夏上人のくそりのくそりの宮女湯
くそり

夏上人樂所の宮女の女二文

くそりとゆくとゆくとゆくと皆
志乳くわふ

^秘 女のゆくと女二文

宮女のできあてまつり給ける

^美 そはゆかりのあの日あふ

て曉還ゆくと女二文

女二文之あふ(渡清くあふ

えんのあふ(あふ)

くそり女房さゆ

禁中(秘伝)の女房大御所と

くそり(あふ)

ひさし乃所車ゆ

^美 底所車に女二文(あふ)

ひさし(あふ)

底漕車 （底漕）

栴檀毛 （栴檀）

糸毛 （糸毛）
綱代 （綱代）

金造 （金造）

こゝのほろむつ

車 （車） 此よりのも物とり

あゝろよ金のころ物うら
也 祿日箋

所び人のいさ車

意より乃所途之箋

出車 （出車）

しユマシヤ

女 （女） 市乃んこのせ

意より此ほく

心をくうらけてみる

つしまた

女二乃あ成意乃里寄りせ

やしく見ゆあさ

きやうりあて

女二乃ゆさゆらち

こゝよりてけ

色あ〜〜れあ〜〜れ

^家大君の幸く此女を娶ひてと

さひまうさむえ

此世もていおくさみ子のつゝ

^妙蓋のあまりたつて

仏〜〜たりて

^家仏よありて三明六通とて

我身此前生し大君との宿

縁ぞとあう〜〜れ

〜〜れ

^家宇治の寺

は〜〜せあふみきり

ふい阿闍梨の寺は〜〜と

ありあり

まいのくら本は〜〜

^は并危々幸くみ山か〜〜れ

^身まをまの年の世

先は〜〜りふと〜〜れ

空法より海りあふ

あよ年り年よあり

私あまのりちくら本城を

りまるとりりときかけの程の

あーさ

^美是ハ八宮の四徳

そ彩さるるよありすりり

八文の正前めりり

女くらまのれあまのりりりりり

あゝぬ

^美浮舟ありありりりりりり

阿まのりりりりりりり

常陸介の法りりりりりり

殿のりりりりりりり

薙のりりりりりりり

りりり

これ多岐さりり

け車りりりりりりりりり

ふくとこみねからいりまひて
くまの海にさかす

舟
かや

意の割にまづき

急うらゆらこいりぬ

美
わ中急よるまはりこいりぬ

ひららせせんいりぬ

常修、常司
あ常修介さうり

任さるる後文

おつやういりぬ
たうりこいりぬ

そ

花
おいのおうらまひ心さうりあり

ね
と子ぬれ

ね
徳洲いりぬ
お智の君あ

美
意れうまぬらうとる合すり

お
お
お

お
お
お

美

薫いゝとくさむに留りす子と人よ
ついでさあそこのうきとて出流す
アスゝあやう又薫とふあつま
んまの志く移流りあそ

所とれんを

美 薫の信の人 昇

馬とひささげをうづ

馬と川 避ふく西流らるる

これ去ん後いまこあふあそ

昇

あう〜〜〜 作事

秘

新造あはれ

美

い新造いけ 作事あそみ

えん

所それるまを

新衣の鳴いそ 衣乃音の

すういさぬれ音うひのしる

秘

下さうひいあさうんれ流へ

大印しし〜あはれめさう

あやうきものしう〜わんた
うきものしう〜わんた
うきものしう〜わんた

あやうきものしう〜わんた
うきものしう〜わんた

あやうきものしう〜わんた

あやうきものしう〜わんた
うきものしう〜わんた

あやうきものしう〜わんた

あやうきものしう〜わんた

あやうきものしう〜わんた
うきものしう〜わんた

あやうきものしう〜わんた
うきものしう〜わんた

あやうきものしう〜わんた
うきものしう〜わんた

あやうきものしう〜わんた
うきものしう〜わんた

月よりみくろあふかゆくめりて
浮舟よけうきひらり人か
西せんのかきよりいこりか
てそやす

西^多あ^せい^んの浮船ははきいりゆも
とあ駈よけしてあふま
てれもろくまよあしてい
車よりきんとりりか
征舟りやす

又^妙か^らい^り人^のま^まむ^らり^あつ^て
是もものこきひらり人

あや
お^られ^ひら^り人^のあ^つて
あや
是^の浮舟り車のうらそ
きいのあ

これおもしろい人なりと
いひこれあはれなりと
いひて

あはれ人のうらやまを
いひてと申さるる事
いふは成やうと云ふ
つまづけはありと

海舟の猶人なりと云ふ
意のあはれ

かきやうりあてちうか
いふと
いふと云ふと云ふと

^ね大君は御
ひのうらつと云ふ

意の意

車いふと云ふは
いふと

^花是よりして女乃車はあり
のうらつと云ふは

車のあ板とえんふに
す物

^秘 女車の車にあつらひり
あ板
とよ物成なておれ
也あにけ用急大
へー昇

いとくろけよかみて
^{良見} 良見

^箋 返るにああも浮舟に車より
あ

こまうらさよるせ
さりそあ

^美 浮舟の衣裳く
知

わらうらあこれうらさ

^花 着苗色

うすあはのす
多てあこれあぬのあ

あてうらあみりあ

美

四尺の屏風をれいそとより
蕙花をんまを

あはさきばよじさそを

浮舟の舟へ

まもろくけふそろくろりりる

人乃のひりへ

うも川の船をりりも

泉川

本津川とよみく日本紀に桃川と
ありつとご五音通すりて崇神
天皇昔は各りては川と申りて
桃枝をりりなへ

都ぞろくそよこり此原ろりり

河風をりり衣の機少山

遠舟フチワタシ 文選 中二

くよのいりり視へこけ川の

まもろく

海沼の舟へ

水れすろれろりり

本津川はろれれれれれれ

まもろく

あづきもちらとちりいりこり木う
ろりん

^必東國の道と思へ南の方を
とふやと見とて 箋

かきういにくうと思つてす
車よりさび入おりつる二人の
こころし

去りいしよもせて
^美主へ 浮舟へ

くひる成うりていりもまうりに
^松ひらけれあ司つじやめまとい
ゆへんともあしと

おしげけりかきよとむらりなると
りつんと

^美浮舟のさば受紙のやうしよ
つらあしと

やういりうさいせ
葉のうらすくみうり折へ

よりまゝ人あれうはや

^美

始り車とりりゆりきりて

蕙の白ひとまうらあいら

む人まうらにわれせそれ物乃

ふ

二番めに車とりりゆりきりて

るひるゆりてありし人感へ

下下ふりてさことそりて

りかとおれまうてりりて

物乃うい

^美

天下テシカと後へ

私あめりてこめても純へ

帝傍國あてあ司此語と

あらせり蕙物とるに

あうりしとる

すまう斗くかすうに行き

弁たりの遠たりの柄あう

たりのうけりてあう此女

のりじりりり 煮れりりみ
まふあへ

物けくぬるか

物けくぬるか 夢

こまれとおろそ

くま物うしとまのれとほめく
起すく

志を以ていと又拵く

退

かうくろまの煮れ立のさけ
つこ又せくぬかのさく

これより満ちるさけの

煮れすれりりくといふあつち
いらふあしゆと人のさくつと
ふれりれいといわやくくじ
つこく

おわりけあつて

夢あめの事あつて煮れりり

事ありと也

あまふんは後めはうらむ

薫れはうらむとほせしそこ

うれとらうらむとめ、そこ

ははらうらむと品今ほ体は

海とやうらむ

この香紙うらむとけ

ほふと薫れうらむとけ

うらむと事

日くくくくくく

弁尾の推考

西海うらむとけ

^は 浄土

薫の知れくくくく

うらむとけくくくく

くくくくく

弁尾の浮船と対面

かめつふらうらむ

花
年の危君此うらうさねくわが
人此わあうら半上にみうら
およはあつま人のかめうら半
いとあうら
杵 さりわうら 翠
あうらあんと

危君此朝の浪よりあうら
うらあうらうらうら
こ此走人うらあうら

此走人うらあうら
うらあうらうらうら
うら

けさうらうらうらうら
うら
うら

うらうらうらうら
うら

うらうらうらうら
うら

うはこまらうらうらめこれより

しよくみゆ

年とくけかして 薫れき

うふく入ひさうき 昇 箋

大君あり 箋

これとらうらつあて

浮舟ゆへり 大君の程く

あつちうらうら 薫れの気

尾ふみれうらうら 十九家

浮舟の程けくひ

ふれぬうらうら 薫れにたり

うらみゆ

中君もをぬり

中君うらうら 浮舟君のぬき

あて

松さこゆら 薫れの中流り

祈のぬき

あれよりうらうら 薫れにたり

とれ

是よりしるさういふ事此人多
しとゆりありふかき事ゆへ
是の兄弟あれはまゝして
志しきそそつさうたれ
故八文のゆふれうらゝ
流らるる事

まゝに二文のゆふた
流舟のさ波八文流ゆふた

人々もてん事

世中におりし事ゆへ

^秘 ^昇 業の心

大君よとく似て世にお
りけれりし事ゆへ

とれ 昇 矣

りうらゝい事そしる事
とれりし事ゆへ

取金 叙銅 合各折 其半授使

者曰為我謝太上一會謹缺是
物尋旧好長恨歌傳

秘

けうきり此字心何ふ一は
金釵とえそ隨ふ此きりも
たは事しと吾宗此ひはひ
しときりしと一

美

かきみり紙乃一吾宗乃
所心の猶そ来た方人一是の
別人なれと兄弟せしと似

ふれハちくさめ一あわりは
蕙の心

人此とあつるなりと

美

巨君ハ蕙此白とさうきりて
のそささるやとあつてうらと
を事するもいふんとして入る
用急あつる人乃とらん
つらといあひまらんよりさ
さゆの香るるたしと一ま

所そるしきありて

^義 意れあよわさるる
孫のさむらひにけり

ありさゆりし

うさぬめさむとたり 意の
しひ多し

満てさあひらる

まうて来り逢らる

かろさこし事

^義 意の内は 船は書成り
ゆるしり

^女 志あむせし侍りのり
年の詞

こそいゝそそあつさゆり

志のいほめてあつさゆり

かうけあつさゆり

^夢 大君はけりり
色ふあつさゆり

トあり

そのあつらひのよやくにあり

まのすし

秘

女二子(意のまのすし)

時をこ 年 箋

色あし 西まのひ

大君の西あし(西まのひ)

文よてもあし

かたも君の西あし(西まのひ)

ほ船の母帝倍々(西まのひ)

かくあし(西まのひ)

秘

意のあし(西まのひ)

とあし

かみひ(西まのひ)

まま(西まのひ)

く(西まのひ)

秘

意此(西まのひ)

い事(西まのひ)

もろりみのすらんこち中つん
やんく

兼

かろり中し年よれまふらう
ほ船りりるまの都るはかきし
うらつげよりのわくちりゆら
こりあし

秋

年つ詞

^兼かろりれ都しもこりあし
志をみとまけてまかた
るあら

ほ

夕うれの世よ
うわよんつる
白鳥れまはく
葉は新しけふ
喜の世よ

日

さくいあり
志りぬん

毛詩云流離
婦少女而
白好志而

甚醜

はなりし
白鳥と

しん

或説云杜若とくかよ花とく
皮説云く此は鳥とくなく
又ハ雲抄云くか鳥の喜日よ
くありかて燕すくぬりのとく
くむのぬくん燕すとく
まぬく志くくく喜く此物あり
くり源氏物語少くあり是
く鳥とく定海に徳定家卿の

不知くくく不推入 只くけく

しん 但未変

葦の舟くんい衣太玉の紙ワきれ
くりにくりて似きくくく為あり
くく大 今葉部くもくくく
く部くくくくくく海あり
くく花共とのくく入てみまかに
かくくハ大葉くくくく似あり
純ハくくくくりて物候とく

ゆきして都をさしゆくこころ
さしゆく川をさしゆく
みづはまはまはまはまはまはま
よくゆくあり

多

魚鳥此後にあふ事く只る
くさる鳥成いつり川舟

夕されのへよ啼きふりる鳥此

一 是の大君はかきや

とくはくくをくくくくくく

あう口すさみのやうのふとい

つらてくさり

舟尾の浮船者よくゆき

梨花奥

うけつるふりるのこころ
さうさう

中君の事

私云清女納言枕草子あり

このおまゝ一々くうよむのまゝの
あゝとくうけりひうとく
くゝとく

東方朔傳

董君之薨也。是日。喪至。年三十而
終。後教。歲。實。大。至。率。与。董。君。於
霸陵。是後。公主。貴。人。多。踰。礼。制。
自董始。

武帝始館陶公主等。實太主

如淳曰實太主也。故曰實太主。

堂邑侯陳午尚

午。孔。至。容。后。年。五。十。余。近。幸。

董偃。姑。偃。与。母。賣。珠。為。事。偃。

年。十。三。隨。母。出。入。至。家。右。右。言。

其。嫉。好。主。召。見。曰。吾。為。母。養。之。

因。留。身。中。故。書。計。相。馬。御。

射。颯。傳。記。年。八。十。而。冠。之。

笑。曰。故。ひ。ご。多。故。う。め。つ。け。

ふくむるるる



